融通念佛・大念佛および六齋念佛

五　來　重

目次

一、序　論……一四七
二、融通念佛と大念佛の關係……二一七
三、融通念佛と六齋念佛の關係……二二〇
四、大念佛・六齋念佛の諸形態……二三三
——奈良縣和歌山縣を中心として——

一、序論——民俗化された融通念仏

私はさきに「民俗的念佛の系譜」（印度學佛教學研究第五卷二號）において融通念佛、大念佛、六齋念佛が一連の系譜につながるものであることをのべたが、その論證には十分の例證をあげることができなかつた。私はこの問題は專修念佛以外に、日本佛教史上に大きな影響力をもつた民俗的念佛の本質をあきらかにするために重要であるとおもうので、本論文ではもう一度この問題を論じ、融通念佛の民俗的念佛化の跡をたどりたいとおもう。そのためにここでは從來あつめられた文獻と民俗資料を、かなり自由に提示してその例證としたいのであるが、いままでに私の採集した民俗的念佛資料だけでもかなり尨大となるので、紙數の都合上その一部しかあげられないのは遺憾である。

すでにのべたように民俗的念佛とは、淨土眞宗や日蓮宗以外の宗派にぞくする檀信徒のあいだに、ひろくおこなわれている念佛的な民俗行事と民俗藝能であるが、これが農耕儀禮や疫癘消除のための年中行事として定期的にもよおされる場合も、葬送などの社會的儀禮として臨時におこなわれる場合も、ほとんど寺院と關係なしに實施されてきた。したがつてこれが文獻にのこされる機會はきわめて稀で、ただ口承傳承または行爲傳承として繼受されてきたので、民俗資料からその原形と變化發展のあとをあきらかにする以外に、ほとんど手がかりのないものである。しかし民俗的念佛の主體となるものは村落または講などの社會共同體であるから、一般に傳承性がつよいので、現存の民俗資料を蒐集・整理・分析・排列すれば、比較的容易に發展の系列を見出すことができる。そしてわれわれはこのような社會的傳承の基盤の上に、空也や良忍や一遍などの突發的であるとともに熱狂的な宗教運動が、日本佛教史上に展開したものと推定するのである。この三人の念佛聖およびその徒衆が勸進した念佛は呪術的・集團的・行動的である

點に共通した特色があるのも、古代的な民族宗教が念佛のすがたをかりて復活してくるのであるから、これが社會儀禮として民俗化し、すすんで藝能化する性格を本來そなえておつたわけである。これは源信・源空・親鸞にながれる正統的な專修念佛とまつたくことなる點で、その內觀的な思辨性、經典に據證をもつ論理的な哲學體系とは對蹠的な念佛信仰である。しかしこのような祖師たちのひらいた宗派の信徒であつても、常民であるかぎり民俗的念佛の要素の混入が多かれ少なかれ見出されるのは、さきにのべたように、この念佛が日本民族の基層文化に根ざしている以上はやむをえないのではないかとおもわれる。

さて現存する民俗的念佛はこれを分類すれば鎭魂呪術的念佛・農耕儀禮的念佛・民俗藝能的念佛にわけることができるが、これらを通じてもつとも大きな系統をかたちづくるのが大念佛と六齋念佛である。大念佛と六齋念佛にはそれぞれ地域的な名稱と形態の變化があり、なかにはこれが大念佛または六齋念佛の派生的なものと一見しておもわれぬものもある。しかしこれを信仰內容や音樂的構造や傳承する社會構成などに分析して考察すれば、大念佛・六齋念佛にその源流をさかのぼることのできるものが全國的に分布している。そして大念佛と六齋念佛の相似性は、またこの二種の念佛にもう一つの源泉、すなわち融通念佛が存在することを暗示するのである。これは融通念佛というものの從來の概念からすれば、きわめて突飛な結論のようであり、そのためにこそ現存する大念佛と六齋念佛の全國的な蒐集と分析を必要としたのであるが、一つにはこれらの念佛には共通の曲調があり、その曲譜の名稱にも類似が多く、しかも念佛のあいだにしばしば挿入されるリフレインに「ユーヅーネンブツ」の語があることなどから、その根源を融通念佛に歸せざるをえないのである。もちろん曲調の類似を證明するためには、樂譜でしめす必要があるが、これは私のなしうるところではないので、錄音によるほかない。しかし六齋念佛のよく保存されたところでは「つぼ

書」と稱する念佛曲調のテンポの長短や發聲上の變化を、きわめて不正確ではあるが、しるしたものもあつて、比較研究の手がかりだけは存在する。いうまでもなく常民のあいだに口から口へとつたえられた曲調であり曲詞であるから、變化と訛りはさけられないけれども、かなり地域的にへだたつたところでも共通性があるのは、これを保存したわが國の村落の傳承性によるものであろう。すなわちこの種の念佛は個人の自由意志による信仰ではなくて、共同體の集團儀禮または共同祈願としておこなわれてきたので、念佛講への加入や念佛曲譜の傳習にはかなりつよい共同體の强制力がはたらいていたからである。この意味でこの念佛に關する民俗資料の信憑性はかなり高いものといわなければならない。

なお大念佛および六齋念佛はその分布がほとんど全國的であつて、私のかぎられた採集能力では全部をつくすことができなかつた。今後もつと廣く、またもつと密にさぐれば、はるかに多數のこの系統の念佛を見出す可能性がある。したがつてその分布を論ずることは中間報告の域を出ないものであるが、一應の分布をしめしてその傳播の中心を推定することとした。のちにものべるようにこの中心として京都と高野山がかんがえられるが、とくに高野山周邊には融通念佛の原形にもつとも近いと推定される純粹な六齋念佛がのこつている。そして各地の大念佛・六齋念佛はいずれもこれに藝能的要素すなわち「風流」をくわえたものが多い。この風流ももとづくところは神樂・田樂・咒師猿樂・延年・歌垣・放下・獅子舞・狂言・音頭・雜藝などであるが、今回はこれにはふれないこととした。しかし從來は大念佛・六齋念佛はこの藝能的要素のみが注意されて、根本にある念佛的要素が無視されている。それゆえ多くの民俗藝能を融通念佛・大念佛・六齋念佛の立場から見直せば、念佛系の民俗藝能がいかに多いかにおどろくとともに、念佛藝能の日本藝能史に占める分野の廣いのにおどろくのである。しかしこのような問題には今回はあまりふれ

ずに、もつぱらこの念佛と村落社會との關係、その傳播系統、行事內容と曲譜・曲調・曲詞などの問題についてのべるにとどめ、論攻の目標を融通念佛と大念佛・六齋念佛との關係におくこととした。

二、融通念佛と大念佛との關係

日本佛教史のなかで融通念佛の正體ほど疑問につつまれた問題はないのであつて、これをもつて一宗派をなした融通念佛宗の宗史も融通大念佛緣起のほかに、たよるべき史料を多くもたない現狀である。もちろんこの緣起は鎌倉末期の正和三年に成立したことのたしかな史料であるから、これを出發點にすることは正しいが、このなかにはすでに歷史としてそのまゝ信じえない部分がすくなくない。そしてこの念佛の相承にも多くのブランクがあり、またこれをうめようとした作爲の跡も見られる。ことに近世初期に平野大念佛寺の融觀大通が、一宗を開立するための教義設定と、大念佛寺を本山とするための宗史作製は、ますます融通念佛の本質を不明ならしめた觀がある。(註1)

しかしこの念佛は融觀まではとくに教義と稱すべきものをもたなかつたし、その相承もまちまちであつて、大念佛寺のほかに清涼寺・壬生寺・法金剛院・善光寺・谷汲山華嚴寺・當麻寺・泉涌寺別院戒光寺・石清水(註2)・大原等にもあつたと推定されるから、これを一本の系譜にすることは無理であつた。すなわち融通念佛は一つの宗派でも學派でもなく、一種の宗教運動であつたわけで、名帳に名をつらねて同志となり、ともに念佛をとなえるものは、その功德をたがいに融通して現當二世の莫大な利益がえられるとの主張にすぎない。このことは融通大念佛緣起（明德版本）の跋文(註3)に

右本願良忍上人融通念佛根本の帳に任て注する所也。此本帳は良忍上人、嚴賢上人に傳しよりこのかた明應上人、觀西上人、尊永上人次第に相承せり。凡本帳にいる人數三千二百八十二人なり。（中略）此等の奇特先蹤を傳聞給

はむ道俗、彼念佛をうけ名帳に入給はゞ、今生には一切の災難をはらひ、後生には必往生をとげ給はむ事、現證右にのするがごとし。一念も疑あるべからず。是を畫圖にあらはす志は在家の男女に念佛往生の信心を增進せしめむがためなり。仍正和第三曆中冬上旬候記之

とあつて匿名の緣起執筆者が正和三年にこれを書いたときには、良忍以後四人の相承者しか知られなかつた。そして永德二年から應永三十年まで四十二年にわたつて融通大念佛緣起を作製頒布した良鎭(註4)や、元享元年に石清水八幡の夢告によつて融通念佛を再興したという法明までのあいだは、まつたくのブランクとなつている。しかしこのあいだに弘安二年には道御（圓覺十萬上人）が清涼寺で融通大念佛會をはじめたことは、清涼寺本の緣起に

清涼寺の融通大念佛は道御、上宮太子の御夢告により、良忍上人の遺風を傳へて、弘安二年に始行し給ひしより以來、とし久しく退轉なし。每年三月六日より同き十五日にいたるまで、洛中邊土の道俗男女雲のごとくにのぞみ星のごとくにつらなりて群集す。

とあり、また同じ道御は正嘉元年に壬生で融通大念佛をはじめたといわれ、大金鼓の銘に

地藏院　奉鑄顯金鼓壹口　正嘉元年丁巳五月廿九日　鑄物師大工大和權守土師宗貞

とある。この正嘉年中にはまた武藏國與野鄕で別時念佛に融通念佛がおこなわれたことが融通大念佛緣起の諸本に見え、大念佛寺誌の神明再授の傳と矛盾する。したがつて元祿版本はこれを「承安の比」と改竄せざるをえなかつたのである。ここに別時念佛に融通念佛がおこなわれたということは、同時に不斷念佛にも融通念佛がおこなわれたともいえるわけで、嵯峨清涼寺の別時念佛會、四天王寺の歲末別時念佛(註5)、石清水の不斷念佛(註6)、大原の不斷念佛(註7)、高野山新別所の不斷念佛(註8)なども種々の點から融通念佛がおこなわれたであろうと推定される。すなわちこの念佛は別時念佛會

や不斷念佛會にとなえる「同音の念佛」すなわち合唱の念佛ではないかとおもわれる。したがつて融通念佛は「大念佛」となるべき必然性をもつていたのである。大念佛はいうまでもなく道俗大衆が多數あつまつて合唱することで、盆踊における大踊というとおなじである。謠曲「隅田川」や「百萬」の大念佛はそのありさまをよくしめしている。文永十一年に一遍は熊野證殿の前で「融通念佛すすむるひじり」とよびかけられたが、(註9) 一遍の念佛の合唱群舞には空也念佛とともに良忍の念佛が入つておつたものといえよう。また融通念佛がかなり早いころにおこなわれた文獻として、われわれは法然上人行狀畫圖第十七にのべられた、聖覺法印の眞如堂融通念佛をあげることができるが、これも「道俗をあつめて」であつた。これは法然上人の三回忌追善のために修せられたもので、現今法然上人御忌に六齋念佛興行があることと何等かの關連があるかもしない。すなわち

上人の第三年の御忌にあたりて、御追善のために、建保二年正月に、法印眞如堂にして七箇日のあひだ、道俗をあつめて融通念佛をすゝめられけるに、往生の要樞、安心起行のやう、上人勸化のむねこまゞ〳〵とのべたまひて

とあつて當時の唱導師たちが結緣者多數をあつめるための手段として融通念佛を興行したのであろう。ということは法會の餘興といわぬまでも、一般に魅力のあるしたしみやすい念佛、いわば藝能性をもつた合唱念佛であろうとおもわれ、それは民俗資料として現存する大念佛や六齋念佛の面からも十分論證されるのである。また長門本平家物語卷四の卒都婆流しの條に

浦人島人集りたる時、念佛をすゝめて同音に申させて、念佛を拍子に亂拍子を舞ひけり

とあるのも鎌倉時代の融通大念佛の普及からかんがえて融通念佛であつた可能性がつよいとおもわれる。

したがつて融通念佛の傳播者は中世に多く活躍した念佛聖または勸進聖であろうと推定され、その普及の功績も俗

悪化・藝能化の責もこれら庶民佛教家に歸せらるべきものであつた。中世文學や中世説話集から見てこのような念佛聖は京都附近では大原・嵯峨・東山・白川にあつまり、近畿では高野、熊野・四天王寺・長谷など、遠くは善光寺・谷汲にあつまつたらしく、それぞれこの念佛の痕跡がたどられるのもそのためであろう。白川では融通念佛縁起の異本であるところの「融通念佛勸進狀」の開板執筆者「白川老比丘遊仙」が良忍より九代の法流をうけたと稱している。(註10) また永德から應永にかけて縁起を勸進した良鎭も、知恩院本奥書に「勸進沙門良鎭謹言、此繪百餘本勸進興行之志は云々」とあり、根津本奥書にも「勸進沙門良鎭云、此繪百餘本すゝめ侍志は云々」とあるように勸進聖であつたことはうたがいのないところであるが、大念佛寺誌がこの良鎭の傳を作爲的にか不作爲的にか第六世良鎭（壽永元年寂）とあやまつたとすれば、やはり嵯峨系の念佛聖とかんがえられるであろう。この良鎭の法兄とつたえられる尊鎭上人が泉涌寺別院戒光寺で融通念佛をつたえたというのは、(註11) 東山系の念佛聖との關係を暗示するものであり、大念佛寺中興の法明が高野山長福院に止住したという事實は高野山の念佛聖すなわち千手院系高野聖と關係のあつたことをしめすものである。そして後にものべるように高野聖のあいだには高聲念佛や踊念佛がおこなわれ、時宗の聖もたくさん住んだのであるから、法明はすでにこの山で融通念佛を知つていたと推定してさしつかえない。そうでなければ現在の融通念佛系六齋念佛の分布の中心に高野山があることはとうてい説明することができないのである。そのほか傳説ではあるが謠曲「百萬」の主人公といわれる道御は播州印南野で融通念佛をはじめたとつたえ、野口の教信寺はながく融通念佛の道場として知られた。播州にはこの野口大念佛と北條の酒見念佛と佐用郡の千種念佛の三大念佛が有名であり同種の念佛がおこなわれた。この教信寺の野口大念佛に七墓廻りのあつたことは近松門左衞門の淨瑠璃「賀古教信七墓廻」からも想像され、現存の六齋念佛に七墓廻りのあることと合せて融通念佛と六齋念佛をつなぐ論據の一つ

である。

以上のような史料からも知られるように鎌倉時代には融通念佛は融通大念佛又は單に大念佛とよばれるのがつねであり、これが合唱と踊念佛をともなつたことは清涼寺本の融通大念佛緣起の清涼寺大念佛の圖や觀阿彌作の「嵯峨物狂」または「百萬」によつても十分想像される。すなわち

「此頃は嵯峨の大念佛にて候ふ程に、此幼き人をつれ申し念佛に參らばやと存じ候。」（ワキ）

「あら惡の念佛の拍子や候。わらは音頭を取り候ふべし。南無阿彌陀佛」（シテ）

で南無阿彌陀佛のかけあいとなるが、これは念佛合唱には拍子のある南無阿彌陀佛の詠唱のあつたことを推測せしむるに十分である。すなわち大念佛が念佛合唱であるために當然拍子と施律がなければならず、また讃美歌のように合唱する大衆が宗教的エクスタシイに入るようなうつくしいメロディでなければ、とてもあのように普及しなかつたであろう。もちろん大念佛ということばは「拾遺往生傳」の沙門清海傳に

正曆之初、勸進自他　修七日念佛　所謂超證寺大念佛是也

とあつて良忍以前にも存在したのであるが、これが一般化したのは融通大念佛以後であつた。法然上人行狀畫圖第三十にも

壽永元曆のころ、源平の亂によつて命を都鄙にうしなうもの其數をしらず。こゝに俊乘房無緣の慈悲をたれて、かの後世のくるしみを救はむために、興福寺東大寺より始て、道俗貴賤をすゝめて、七日の大念佛を修しけるに、その比までは人いまだ念佛のいみじきことをしらずして、勸めにかなふものすくなかりければ云々

とある大念佛ははたして融通大念佛であつたかどうかはあきらかでないが、俊乘房重源がみずから南無阿彌陀佛とな

のり、人にも阿彌號をすすめたことには、南無阿彌陀佛をくりかえし詠唱する融通念佛の影響がかんじられる。何となれば重源が阿彌號をひろめる意樂をおこしたのは、文治二年に良忍の遺跡大原の勝林院における大原問答に陪席したときのことで、(註12)このときの高聲念佛は融通念佛であつたと推定してあやまりはない。すなわち

法印（顯眞）香爐をとり高聲念佛をはじめ行道したまふに、大衆みな同音に念佛を修する事三日三夜、こゑ山谷にみち、ひゞき林野をうごかす。信をおこし緣をむすぶ人おほかりき。(註13)

とある同音の高聲念佛はなんの曲調もなければとても不可能であろう。その上このとき以來顯眞法印は一向專修の行者となつて、念佛勸進の消息を姨の禪尼につかわしたのが「顯眞の消息」といつて流布したといい、その詞に

一行すなわち一切行なれば、念佛の一行に諸行ことごとくをさまり、一念すなわち無量念なれば、一稱彌陀なにの不足かあらん。

と融通念佛的な語句がある。そしてその翌年の文治三年正月十五日から十二人の念佛衆による不斷念佛をはじめたとき、

開白の夜は十二人皆參じ行道して同音の念佛を修するに、毘沙門天王列に立給へりけるを法印まのあたり拜したまひて、良忍上人の融通念佛には鞍馬の毘沙門天王くみしたまひ、あまつさへ諸天善神をすゝめ入給ひけることも思合せられ云々

とあることから見て、この不斷念佛は融通念佛またはそれに近いものであつたことはうたがう餘地がない。いわんや顯眞法印がこの不斷念佛を相續するために勝林院に五坊をたてて、楞嚴院安樂谷をうつして新安樂と號したという飯室の楞嚴院安樂谷(註14)は「融通念佛勸進狀」の勸進沙門理圓の住むところであつたのである。

このように大念佛にせよ不斷念佛にせよ、同音にとなえる念佛が融通念佛に關係があることは、融通念佛が美しい曲調をもつた念佛の詠唱であることを推定せしめるものである。そのうえ、のちにのべるように各地の六齋念佛の曲譜には融通念佛のくりかえしがあり、また六齋念佛を融通念佛とよぶところもあることから、六齋念佛を融通念佛の傳統をついだものとすれば、これが合唱に適する美しい曲調をもつたものであろうとの推定を一層つよめることができる。私はもちろん現存の六齋念佛の古態を存するものがそのまま良忍の作曲になる融通念佛と主張するわけではないが、これに近い形式のものであろうとかんがえざるをえない。近世でも融通念佛と稱する懸念佛、すなわち念佛講の多人數が鉦をうち節をつけて高聲の六字名號をかけあいにとなえたことが鹽尻などに見える。(註15)

このように曲調のある念佛の詠唱はまた「專修念佛の曲」ともよばれたらしく、永仁三年成立の野守鏡はこれを蓮入房の作としている。

聲明の曲のあらたまりしはじめを尋ぬれば、蓮入房といひし人、くわしく良忍上人の口傳をうけざりし流にて、ただはかせにまかせて大原の聲明を興行せしよりして、上人の妙曲をうしなへり。その子細今の歌のごとく、はかせにまかせ聲にまかせて思ふさまに曲をなすによりて、呂の曲は律になり律の曲は呂になりて陰陽たがひ侍りしほどに、專修念佛の曲流布して男女是にこぞりしかば、人皆聲明のきゝを遠くして侍りけるに、嫡々相承の妙曲をあらためしゆゑなるべし。それよりしていまにいたるまで專修念佛の曲さかりなれば、正道の佛事をおこなふ人まれなり

といつて非難された專修念佛の曲というのは、おそらく南無阿彌陀佛の六字名號のみを節付してとなえる六齋念佛のごときものとかんがえられる。そしてこれが永仁のころには蓮入房の作曲の方がひろくおこなわれたのであろうが、

これも良忍上人の妙曲をあらためたにすぎないのであるから、その原曲はやはり良忍のものと解釋してさしつかえないであろう。良忍の融通念佛を單に「一人一切人、一切人一人、一行一切行、一切行一行」の圓融相卽の教理のみで理解することは、良忍の日本聲明史ないし日本音樂史上の業績を無視するものである。すなわち良忍の眞の價値は魚山流聲明のみならず日本聲明の大成者であつた點にある。しかも良忍の聲明は慈覺大師いらいの叡山の聲明に通曉したばかりでなく、興福寺の內梵音をのぞくすべての音曲を統一したもので、凝然の聲明源流記の大原良忍上人傳によれば

本覺房尾張國人也、本者、叡山東塔阿彌陀坊堂僧也、慈覺大師弘傳二聲明一以後、各達二一曲一習學練磨飛レ名、良忍上人謁二彼哲一、習聚精研以爲レ一、流傳弘通、卽於二大原一建二立來迎院一除二興福寺之內梵音一餘諸音曲語練一統

とあり、また

至二良忍上人一普隨二諸哲一廣値二多般一語二練諸曲一貫二括多門一

とあつてあらゆる音曲に精通してこれを統一したことをのべている。そのなかには聲明のほかに和讃や雅樂も入つておつたらしく、聲明源流記の賴澄傳には良忍が賴澄から百石の曲に準じて舍利讃嘆の和讃を習つたことをのせ、大原三千院所藏の「極樂聲歌」も良忍またはその前後の時代の成立とされるが、和讃風の法文歌に雅樂の曲名がつけられている。(註16)すなわち良忍は梵漢和の音曲を統一して聲明を日本化したものといわれ、宮中でおこなわれた法華懺法の美曲はその代表的な作曲といわれる。すなわち聲明源流記に

慈覺大師昔傳二彌陀之引聲一、良忍上人近弘二懺法之美曲一

といつたのはこれで、これほどの良忍がその融通念佛をひろめるのに音曲の才を發揮しなかつたとはとうていかんが

えられない。しかし良忍の時代には日本的發聲による今様が流行しておつたのであるから、念佛を藝術的にうたいやすくするためには聲明に今様や朗詠調をくわえた作曲をほどこしたであろう。ところが現存する六齋念佛のもつとも古い形態のものは聲明調と朗詠調の混然とした美曲で、これは聲明源流記にいわゆる

寶號作二歌聲一　讃頌致二吟詠一　甲音乙音隨レ宜歌讃、引聲短聲任レ時誦詠

とあるのにあたるであろうとおもわれる。

もちろん良忍が融通念佛を作曲するにあたつてその基調をなしたものは叡山常行堂の引聲念佛であろう。引聲念佛は帝王編年記卷十三、承和十四年の條に

大蘇山法華三昧、清涼山常行三昧、大師（慈覺）之所レ傳也。解二歸舟纜一赴二野馬臺一。於二船上一二尊顯現、傳二成就如是也節一給。或記曰、澁河鳥(邊イ)隋煬帝於二汴河一作二此曲一。慈覺大師引聲念佛吹レ笛被レ渡レ之。今曲其音也

とあり、同書卷十四、寛平六年甲寅八月十一日の條に

常行堂始修二引聲念佛一、彼引聲念佛者慈覺大師於二大唐清涼山一謁二法道和尚一所二傳給一也。極樂法音也。歸朝之時於二船上一二尊顯現。令レ傳二成就如是也節一給矣

とあり、古事談はこれを引聲阿彌陀經の節としており、眞如堂緣起も

極樂世界の八功德池の浪の音に唱ふる曲調を傳て、引聲の阿彌陀經を受得したまふ。

としている。そのいずれかは知る由もないが、拾玉集百首歌の釋教に

立柚やなむあみだ佛のこゑ引ば　西にいざなふ秋の夜の月

とあり、玉葉集に「常行堂の引聲念佛を聽聞して」と詞書のある前大僧正忠源の

夜もすがら西に心の引聲に　かよふ嵐のおとぞ身にしむ

の歌があるから引聲念佛のあつたことはうたがう餘地がない。また法然上人行狀畫圖第三十六にも攝津勝尾寺に引聲念佛のあつたことをつたえ、[註17] 四天王寺の引聲堂短聲堂では彼岸の中日には融通念佛がおこなわれて、[註18] 引聲念佛と融通念佛の關係を暗示するものがある。

このような念佛の詠唱は淨土眞宗にもあつたらしく改邪鈔や最須敬重繪詞に「多念聲明の法燈、俱阿彌陀佛の餘流」や「一念の音曲に節拍子を定めた」教達の弟子樂心などの名が見えている。[註19] このような念佛に節博士をつけた詠唱の源流は良忍にもとむべきものであろう。

ところで融通念佛が平安末から鎌倉時代・室町時代にかけて都鄙を風靡したもつとも大きな原因は、大念佛形式による念佛の合唱と、その曲調の藝術性であろう。しかしこれはまた念佛が俗化し、娯樂化し、傳播した地方の鄕土藝能と結合して變質してゆく契機もこの點にあつたのであり、大念佛狂言や大念佛放下踊、念佛踊（なもで踊）劍舞（けんばい）盆踊等の民俗藝能となつたのである。われわれは鎌倉室町時代の融通大念佛の曲調はもはやそのままきくことはできないが、謠曲「隅田川」や「百萬」や「三山」の大念佛と融通念佛では一種の曲調をもつた南無阿彌陀佛のくりかえしとかけ合いをきくことができる。ことに「隅田川」の亡靈頓證菩提のために「僧俗をきらはず人數を集め」た大念佛では鉦鼓をならして「南無や西方極樂世界、三十六萬同號同名阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛　南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」の讃文は、現存する六齋念佛の「眞光朗」の曲の讃の一部であることにふかい興味をそそられるのであつて、大念佛を媒介として融通念佛と六齋念佛のむすびつきが暗示されるわけである。

（註1）元祿四年大念佛寺から版刻刊行された元祿版の融通大念佛緣起（冊子本）の奥跋は明德版本の「仍正和第三曆中冬上旬候（仲）

記之」の正和を治承にあらためたことはあきらかで、俊直本（至徳元年）來迎寺本（永徳頃）知恩院（永徳二年）等の南北朝時代に書寫され刊行されたものとまつたく矛盾する。また明徳版本の「康應元年十二月八日依良鎭上人所望書之　親王青蓮院宮」も康應を康永にあらため、良鎭を法明にあらためてある。これは大念佛寺誌が大念佛寺中興の法明を直系にかぞえる必要上作爲をくわえたもので、緣起勸進の良鎭はこの寺に關係がないからである。明德版本の康應元年にはすでに法明は示寂しておるので貞治五年以前の類似の年號康永をとつたものであろう。また緣起內容の正嘉疫癘の段の正嘉も承安にあらためるなど作爲の跡歷然たるものがある。これは融通念佛がばらばらにつたえられたのを一本にしようとしたための矛盾である。

また寺誌では天和二年に融觀は盧山衣と天台衣の服制の僻執に裁許を請うため江戸に出て幕府にうつたえたことがあり、このころ一宗をなす猛運動をしたらしく、元祿元年に幕府の命で平野にかえり、大念佛寺に董したのはその許可をえたものであろう。しかし京都上賀茂山田家所藏文書には次のようにあり、元祿八年に香衣許可の勅許を願出ておるので、形式的にはこのころが開宗の時期ではなかろうか。

口上之覺

一、從先年奉願望候通　融通宗門之末寺大分御座候得共　香衣之僧無御座候故　出世之規模も無之　一宗之僧俗共歎敷存候ニ付　何とぞ　勅許被爲成下候樣奉願候　就者淨土宗鎭西派者四ヶ惣本寺智恩院支配ニ而　末寺之香衣被申上候　又西山派者西山光明寺東山禪林寺兩本寺支配ニ而　被申上候　然上者融通大念佛宗又各別之一派ニ御座候間　今度一宗派御取立と被爲思召　末寺僧侶之香衣蒙勅許候樣ニ拙僧　奉願候　已上

元祿八年亥七月廿五日

融通大念佛寺　　大通

（註2）石清水にあつたろうということは法明の神明再授の傳に、良忍の融通念佛の法具法器が石清水に納められていたということがあるので、神佛習合のとくにつよかつた石清水八幡またはその神宮寺護國寺におこなわれていたものとおもう。この推定

をつよめるのは延久二年に大江匡房の執筆した石清水不斷念佛緣起に、治暦三年以降毎年石清水八幡寶前で、叡山西塔院常行堂結衆十二口が三箇日の不斷念佛をおこなつたことが見え、これに「擇二此地之禪侶一、以敎二此法之度曲一」とあるのは、叡山常行堂の引聲念佛がここにあつたことをしめし、引聲念佛の日本化された作曲を融通念佛とかんがえる私の說からいえば、當然ここに融通念佛が引聲念佛に代つておこなわれていたろうと推定される。

（註3）この跋文は來迎寺本にもあり、俊直本、知恩院本には最後の二行のみある。

（註4）この良鎭は融通念佛宗系（善光寺大勸進融通念佛血脈譜も谷汲山融通念佛血脈譜もおなじ）に第六世とする良鎭とは全く別人である。大念佛寺誌にある第六世良鎭上人傳は何によつたものかあきらかでないが、融通念佛緣起を六十餘州に頒布したとあるところから見れば、永德・應永の良鎭と混同していることはあきらかである。しかし法明をその弟子とすることは時代的にあきらかに錯誤で、神明再授の傳をつくるために架空的に作爲されたものであろう。ただ私がこの第六世良鎭上人傳に注意したいのは、念佛聖が平安末期にあつまつた高野山の念佛聖と密接な關係のある嵯峨に、融通念佛がおこなわれたとおもわれる點と、良鎭の法兄とされる尊鎭を通じて泉涌寺別院戒光寺にこの念佛が傳えられたことがうかがわれる點である。

（註5）一遍聖繪　第九

（註6）（註2）參照

（註7）法然上人行狀畫圖　第十四

（註8）法然上人行狀畫圖　第四十五、發心集卷七、南無阿彌陀佛作善集、重源讓狀等

（註9）一遍聖繪　第三

（註10）融通念佛勸進狀（奈良縣川中祐一氏藏）は文政十一年に詮海が摸寫したもので、天保十一年の伊勢松阪來迎寺妙有の版刻もあるが、原本は正和三年の融通大念佛緣起より以前の成立と推定される。その勸進沙門は山門楞嚴院安樂谷理圓であるが開板の奥書は次のようにある。

開板執筆白川老比丘遊仙依レ稟二忍上人九代流一故書レ之　冀彼本誓融二我欣求一矣

（註11）大念佛寺誌、第六世良鎮傳に

宗系一時中絶せりと雖も法兄尊鎮上人は泉涌寺別院戒光寺に入りてこれを傳へ、念佛の法系は日本國中脈々の中に相傳ふ。壬生寺、法金剛院、清涼寺、善光寺等其最たり。而して遂にこの法系より嵯峨大念佛狂言の始祖たる十萬上人を出すに至れり。

とあるのはそのまま信ずることは出來ないが、泉涌寺と融通念佛の關係だけはかんがえてよいとおもう。

（註12）法然上人行狀畫圖卷十四に

かの時大佛の上人俊乘房、又一つの意樂をおこして、我國の道俗、炎魔王宮にひざまづきて名字を問れんとき、佛號を唱へしめんために阿彌陀佛名をつくべしとて、みづから南無阿彌陀佛とぞ號せられける。これ我朝の阿彌陀佛名のはじめ也

とあり「かの時」とは大原問答をさす。

（註13）同上畫圖の同卷

（註14）同上、圓光大師行狀畫圖翼贊卷十四によれば安樂谷は叡桓及び源信の久住の地で念佛三昧の道場であり横川へ上る途中の飯室谷の右二町計りのところという。大原の新安樂の五坊は今は絶えて僅に安樂院一房をのこすのみであるが、勝林院の境内に五坊屋敷というところがあり基趾を存するとある。

（註15）鹽尻卷六に次のようにある。

良忍上人は尾州富田の人、晩に融通念佛を勸む、いかなる唱ぞや、予曰、前に或僧に聞し融通念佛とは廻我所唱融會衆人唱又通千我云々今十念を授受する是融通念佛なり。然れば源空以來淨土宗の唱ふる所も之良忍勸めし所を受て也。鉦を擊和するは空也以來也。今歳夏信州善光寺の佛像我府下（名古屋）に來り朝夕勤行する融通念佛全く是かけ念佛にして十念授受なり。

（註16）橋川正氏「大原三千院の極樂聲歌について」によると曲名は裏頭樂、甘州、郎君子、廻急　又樣　五聖樂破、同急、蘇合急、換頭、慶雲樂、想佛戀　往生急、半帖、萬歳樂　倍盧、大平樂破、三台急等があり、全體に譜がほどこされて和讃または

法文歌が雅樂の曲あるいはその變奏曲でうたわれたことが知られ、これは平安又は鎌倉初期を下らぬものという。

（註17）「攝津國勝尾寺にしばらくすみたまふ。このてらは善仲善算の古跡、勝如上人往生の地なり。上人西の谷に草庵をむすびてすみ給けり。おりふし恒例の引聲の念佛ありけるに」とあり、今も四月二十五日には鉦講念佛（六齋念佛の變形）がおこなわれる。

（註18）圓光大師行狀畫圖翼贊卷五十一に「引聲堂（彌陀北）短聲堂（釋迦文殊普賢南）右二堂處々ニ念佛堂ト號スル是也。西門ノ外鳥居ノ内左右ニタテリ。法事記ニ云々、聲明ニ引聲短聲ノ分チアリ。故ニ堂ノ名トセリ。夫聲明ハ弘法慈覺ノ二大師ヨリ始マルトイヘトモ、今ノ世ニ普クヒロマル事ハ大原ノ良忍上人ヨリ起レリ。融通念佛モ此上人ハシメ給ヘリ。今此所ニテモ春秋彼岸ノ中日ニ融通念佛ヲツトムルナリ。」とあり、翼贊の出來た元祿十六年ころはこれがあつたのであろう。

（註19）改邪鈔末には「ソレヨリコノカタワガ朝ニ一念多念ノ聲明アヒワカレテ、イマニカタノゴトク餘塵ヲノコサル。祖師聖人ノ御トキハサカリニ多念聲明ノ法燈、俱阿彌陀佛ノ餘流充滿ノコロニテ、御坊中ノ禪襟達モ少々コレヲモテアソバレケリ。祖師ノ御意巧トシテハマタク念佛ノコハヒキ、イカヤウニ節ハカセヲサダムベシトイフオホセナシ。……マタク聖人ノオホセトシテ音曲ヲサダメテ稱名セヨトイフ御沙汰ナシ。云々」とあつて坂東聲をわざとまねて念佛を詠唱したことがうかがわれる。いわゆる坂東念佛であろう。最須敬重繪詞六には「門跡參仕ノイニシヘモ隨分ニ聲明ヲタシナミ給ケルガ、隱遁ノ後ハ殊ニ意ヲ淨土ノ曲調ニ入テ名ヲ非道ノ秀逸ニエタマヘリ。一念ノ音曲ニ節拍子ヲ定ケルハ敎達ナリ。カノ弟子ノ中ニ樂心トキコユルハ上足ナリ。云々」とある。

三、融通念佛と六齋念佛の關係

すでにのべたように融通念佛が本來大念佛という合唱形式によつて、功德を自他相互に融通するものであることは、いろいろの點から推測されるが、名帳日課念佛の意味も名帳に入るものの念佛は、時間と空間をこえた合唱と見

做したものとおもわれる。すなわち元亨釋書、良忍傳に

廻二我所一唱融二會衆人一　衆人之唱又通二于我一　是融通念佛也。其功踰二獨稱一不レ可二勝計一

とあるのはこの意味であろう。また融通念佛勸進狀にあるように

父母師長妻子朋友の菩提を訪はんと思はん人、同じく亡者の名字を此帳にのせて、其念佛を唱へ給べし

というのも亡者の念佛をこの大合唱に參加せしむる意圖とおもわれる。いわばこの念佛は一種の宗教的署名運動と「うたごえ」運動と見ることができる。しかしこれが都鄙に普及して大衆化するにつれて俗惡化の一途をたどつたことは止むをえないことであつた。この傾向のはなはだしかつた鎌倉末期に、元亨釋書はこれを源空の徒の遺派末流のしわざとしているが、(註1)これはむしろ淨土宗、時宗をふくめた大念佛勸進の念佛聖のうくべき非難であつたかもしれない。すなわち

元曆文治之間、源空法師建二專念之宗一、遺派末流或資二于曲調一抑揚頓挫、流暢哀婉、感二人性一喜二人心一　士女樂聞雜沓駢闐、可レ爲二愚化之一端一矣。然流俗益甚、動衒二伎戲一　交二燕宴之末席一　受二盃觴之餘瀝一　與二瞽史倡妓一促レ膝互唱、痛哉　眞佛祕號蕩爲二鄭衞之末韻一　或又擊二鐃磬一打二跳躍一　不別婦女　喧噪街巷、其弊不レ足レ言矣

とあつてさかんに雜藝をまじえて念佛踊をしたありさまがうかがわれる。そしてこのような念佛に放浪の雜藝的乞食僧すなわち暮露、梵論字が發生したらしく、徒然草百十五段に

宿河原といふところにてぼろぼろおほく集りて九品の念佛を申しけるに

とある九品の念佛も、融通念佛の本山、平野大念佛寺の三時の課誦にとなえる「宗祖正傳稱念佛寶號」または「融通如法念佛」(註2)とよばれる念佛が九品の念佛であることからかんがえると、これも融通念佛系の雜藝的念佛ではなかつた

かと想像される。そしてこの種の乞食僧が諸方に雑藝化した融通念佛をつたえたらしく、三河の奥の盆供養念佛（六齋念佛）[註3]には「暮露」と書いた燈籠をたてることが現におこなわれており、奥三河の放下踊や遠州大念佛の放歌踊も雑藝の徒、放下僧[註4]のつたえた大念佛系の藝能であるらしい。

このような傾向にたいして鎌倉末期には改革運動、復古運動がおこつたのは當然で、弘安二年に嵯峨清涼寺の融通大念佛をはじめた道御は、法隆寺上宮王院で聖德太子の御夢告をうけてこれをひろめたというが、その目的とするところは戒律をまもつて念佛をする持齋融通大念佛であつた。すなわち法金剛院藏の圓覺上人（道御）自筆肖像といわれる絹本着色の一軸は、彼の示寂からあまりへだたらぬ鎌倉末期の優秀な肖像畫で、その賛（稱名院殿筆）に

常勸二持齋與二念佛一　普濟二若干之衆生一　世謂二之十萬人聖一矣

とあり、寺傳によれば法金剛院を建治二年に持齋融通大念佛根本道場とした。道御ははじめ東大寺の僧であつたが、のち唐招提寺、法隆寺、清涼寺、壬生寺、法金剛院等に住し應長元年八十九歳で法金剛院に示寂した。しかし彼がはじめから律僧であつたかどうかはいささか疑問で、法隆寺新堂院の棟札[註5]には「勸進聖人圓覺」とあり、また「法金剛院古今傳記」にも

於二清涼寺一建二地藏院一　安二置菩薩尊像幷太子尊容一　而後發二回國之志一

とあつて勸進聖のおもかげがあり、肖像畫賛に「或移二淨財一修二廢寺一　拯二悲田之貧病一　賑二員扉之寃囚一」といい、古の行基菩薩の流であつたとのべるなど念佛聖ではなかつたかとおもわれる。ただ凝然の圓照上人行狀下卷に「圓覺上人雖レ非二受戒弟子一化導興隆徧、投二照公門下一、仍以二上宮王院一　付レ之令レ興」とあるのは圓照が八幡善法律寺の開山であるだけに建治三年ごろ律僧になつたのではないかと想像される。ともあれ道御は融通大念佛の俗化と藝能化に

改革運動をおこした一人であることは否定できない。

また高野山でも鎌倉初期の高野聖の一派である明遍系の蓮花谷聖のあいだに踊念佛があつたらしく、(註6) また他の一派であつた萱堂聖も八葉の峯八つの谷にひびきわたるほど、はげしく鉦をたたき高聲念佛して踊る大念佛系の聖であつた。高野聖の第三の一派は時宗の徒でこれが踊念佛をしたことはいうまでもない。これを非事吏事歴(註7)は、

抑當山非事吏の創は高祖弘法大師入定後三百十八年、應保二年壬午に至て明遍上人十九歳にて此山に登、蓮花谷に棲息し修懺堂を建て、念佛の行を兼修す。是當山に念佛稱名の權輿なり。此時上人の下部八人、髪を剃て其業を勤む。即ち八葉の聖と云ふ。此時尚宗の名を立てず。唯念佛者と云のみ。是非事吏の濫觴なり。其後弘安(ママ)九年壬午法燈國師の弟子覺心老夫、此山に縁あるを以て來て萱原に鉦鼓を叩て念佛す。又一遍上人智眞此山に登て念佛す。非事吏等其宗風に染む。此三類の非事吏終に混一して鉦鼓を叩き靜場を喧し、或高聲念佛踊念佛の異行を企、剰へ諸國に遍歴して空口を負て高野聖と號して吾山の瑕瑾を露し云々

とのべている。かくて鎌倉時代の高野山は念佛の徒の占據するところとなり、密教いちぢるしくおとろえたので、南北朝時代ごろから改革運動と復古運動がおこり、教學においては宥快、長覺による南山教學の大成があり、山内肅情のためには應永二十年五月二十六日の五番衆一味契狀となつた。(註8) これにはまず高野山の念佛盛行のありさまをのべて

爰近年云覺心荒入道密嚴院傍結草庵　偏令念佛以來、號高野聖負空口令頭陀諸國　是則易行得分之作業故、被捨千世類、擧入此門　於今者寺家大躰成念佛之菴室　密教爲滅　可不歎乎

といい次に三箇の禁制を出している。

條々

一、高聲念佛　金叩　負頭陀　一向可二停止一事

一、踊念佛固可レ止事　萱堂外

一、於二寺邊一新造菴室堅可レ制之事

すなわち大念佛系の高聲念佛と鉦鼓と踊念佛を禁じたのである。

このように鎌倉末期から南北朝時代に京都と高野山に融通大念佛の改革運動がおこつたのは注意すべきことで、河内における法明の融通念佛中興も復古運動の一環であつたのかもしれない。室町時代に入つても持律と念佛を結合した戒稱二門を標榜する主張が、天臺宗から西教寺の眞盛上人によつておこされるのも、このような念佛俗化の改革運動としてとらえることができよう。しかし持齋と念佛をむすんだ六齋念佛という名稱がどこで何時から用いられたかはあきらかでない。ただしこの名稱の初見は私の管見では大和宇智郡阪合部村待乳峠の西福寺板碑群のなかに

六齋念佛供養

延德二年九月十五日

とある高さ一米六五糎、幅七五糎の板碑がもつとも古く、この名稱が固定したのは室町中期とみてよいであろう。ただこの板碑について注意したいのは、中世における念佛聖の一中心である高野山は、現在においても六齋念佛分布の一大中心であるが、高野山と密接な關係にある待乳峠にこの碑があるのは意味がふかいといわなければならない。すなわちこの紀州大和の國境であり、高野山寺領の境界でもあつたこの峠は、高野山蓮花谷の禿法師のもと住んでいたところといわれ、明遍の蓮花三昧院の支配下にあつた。非事吏事歴によると禿法師は

彼等の口碑に原大和の待乳峠に住居せり。今に由緒のものあり。弘法大師業病のものを憐愍して阿彌陀佛一軀を彫

刻し、念佛の法を授給ひて阿彌號をも許し給ふ。其後同病のもの相集て日夜念佛懺悔して往生を祈りけるに、中頃明遍上人てふ念佛の知識、蓮花谷蓮花三昧院に栖息し給ひければ、彼上人の法化に浴して終に蓮花三昧院の指令に隨ひ奉る。（中略）古老傳に昔時大和待乳峠に癩者二人ありて業病を歎き悲む。偶弘法大師行化し此處に止息し給ひければ、癩者等救療を願ふ。大師憐愍して一人には膏藥の製法を授て諸人に此を賣りて生涯を送るべしと命給ひければ、今に彼所に其傳ありて待乳の膏藥をひさぐ。一人は高野山に召具し給ひて金剛草履を作りて賣らしめ給ふ。

とある。そして高野山周邊の紀州大和の各地に融通節を有する六齋念佛がもつとも濃厚に分布していることは、この念佛の一つの中心として高野山を想定せしめる有力な根據である。

しかし一般に六齋念佛は空也上人のはじめたものといわれ、眞宗故實傳來抄にも

六齋念佛は空也の餘流にして蘭盆のことに非ず。月々六齋の念佛、空也流、誓林流とて二流あり。本式は空也上人所造の和讃に念佛を加へて唱ふ。又良忍上人の融通念佛和讃を加へて念佛す。

とのべられ、京都では空也堂系の六齋念佛しか知られなかつたのである。しかしこの系統の六齋念佛に融通念佛和讃のあることは良忍上人の融通念佛の流れをくむことを意味するものであろうとおもう。大和平野部の融通念佛宗檀徒のあいだに存する六齋念佛にも融通回向の一曲があるが、これも無常和讃と來迎和讃の混合した融通念佛和讃である。空也堂六齋念佛には十二段念佛の曲名がつたえられ、その中に「融通」の一曲があり、空也堂より免許をうけた京都周邊の六齋念佛にその痕跡をのこしている。また空也上人繪詞傳に六齋念佛の起源をのべて松尾神社との關係をとき、

神これを悅、御前の鰐口と太鼓を布施に上人にあたへ、末世の衆生利益の爲に此太鼓をたゝき念佛をすゝめ給ふべ

し。此報謝には上人あらんかぎりは、影の形にしたがふがごとく守護し申さんと宣ひて內陣へ入せ給ふ。上人歡喜かぎりなし。それより國々在々所々に入て、每月齋日ごとに太鼓鐘をたたき念佛唱へ衆生を勸め給ひて、往生する人のある時は太鼓鐘をたゝきて念佛を申す。有緣無緣の弔をなしたまふなり。是に依て俗呼で六齋念佛といひ傳へたり。それより每年松尾御神前において氏子集り六齋念佛を勸め神慮をすゞしめ奉る。明神上人に逢給ひて後、神前に鰐口なし。御湯を進る事なし。神事に太鼓なし。神慮をすゞしめんとおもはば、我前にて太鼓鐘をたゝき念佛を唱へよとの御註宣に仍てなり。

というがこれは六齋念佛に神樂が結合してからの傳承をしるしたものであろう。また六齋念佛と空也の關係はこの念佛が鎭送呪術念佛として、死靈を鎭めるための呪的舞踊をともなつたので、踊念佛の祖としての空也との結合ができたものと推定される。もちろん六齋念佛はこれが大念佛の改革運動として發祥したときは、踊念佛のような雜藝や神樂のような藝能を排したわけであるが、これはまた民俗的念佛となればすぐ結合して、現在京都周邊に多く見る空也堂系六齋念佛のような神樂や獅子舞の六齋となつたものであろう。これは紀州大和の高野山系の六齋念佛と比較するとき歷然とするのであつて、後者の中にはもと舞踊曲だつたとおもわれる「白舞」や「阪東」の曲があるにもかかわらず踊ることなく、純粹な佛敎的聲樂としての嚴肅さと品位をうしなわないのである。しかも京都周邊の空也堂系六齋念佛にも大和紀州の六齋念佛の曲の一部をたしかにもつており、これに神樂や踊念佛の附加されてゆく過程をしめす中間的なものがあるので、高野山系の六齋念佛から空也堂系の六齋念佛への變化は否定することができないと信ずる。

次に六齋念佛の一派に干菜寺系のものがあり、おもに淨土宗關係の檀徒のあいだに依用される。この系統の六齋念

佛の本寺は京都元田中の光福寺、俗稱干菜寺で、この派は創始者として春日（現在の烏丸丸太町）の常行院と山城乙訓郡安養谷東善寺に住した道空をあげる。道空は法如上人とも圓爾上人ともいわれ、西山上人三代の法孫で、文永元年に六齋念佛をはじめ、正和二年に花園天皇から「常行六齋念佛寺」の勅號をたまわつたとするのである。この傳承は光福寺に藏する天和二年奥書の「淨土常修六齋念佛興起」の一卷にくわしくのべられておるが、この緣起を正和三年に道空が弟子空察におくつた由の事書は信じられないから、(註9) 第四世信光のとき永正年間に後柏原天皇より「六齋念佛總本寺」の勅號をたまわつたあたりからが眞實であろう。信光はこのころ現在の寺地に齋教院を創設したが、これはさきにのべた大和待乳峠西福寺板碑からおくれること十年ほどである。すなわちこの前後から六齋念佛は京都においてもはなはだしく流行したため、本寺の設定が必要となつたのであろう。このときから信光は齋教院光福寺第一世となり第三世空心のとき、文祿二年に六齋念佛に傾倒した豐臣秀吉によつて「六齋念佛總本寺干菜山齋教院光福寺」の寺號をゆるされたという。(註10) この系統の六齋念佛は「六齋念佛村方帳」に見られるとおりかなりひろく分布したが、一部のものをのぞいては儀式的要素と藝能的要素が濃厚である。しかしその念佛詠唱にはやはり高野山系の六齋念佛の曲調の一部がのこつておるのでまつたく別物ではなく、高野山系、空也堂系とともに一つの源泉からながれ出たものと推定され、これが融通念佛であつたろうとおもわれる。齋教院發祥の原因はよくわからないが、やはり淨土宗内における大念佛俗化にたいする持齋念佛運動のあらわれではないかと想像され、室町時代の戒律と念佛の結合がここにもあらわれておると見ることができよう。この系統の六齋念佛の特色については各論においてのべることとするが、第一の特色は鉦の打ち方で、これが一方では淨土宗寺院につたえられた六齋念佛系の鉦講念佛になるのである。鉦講念佛は京都では眞如堂、誓願寺の十夜念佛となり、近江淨嚴院の太鼓念佛となり、關東では鎌倉光明寺の十夜念佛として關東

一圓にひろまつており、尾張知多半島では四遍念佛とよばれている。これは六齋念佛の一曲「四遍」を詠唱するからである。鉦講念佛は光明寺十夜縁起によれば叡山常行堂の引聲念佛をつたえたものというが、融通念佛と六齋念佛を經てこの念佛にいたつたことはうたがいないであろう。圓光大師行狀畫圖翼賛卷二十四によると

常行堂ノ行法ハ仁壽元年（慈覺大師）諸徒ニ授テ常行三昧ヲ修ス。……此ノ行法ニハ例時ノ阿彌陀經、引聲念佛ヲ修セラル。緩漫タル曲調ナリ。……後土御門院明應四年觀譽上人ヲ宮中ニ召サレテ行ハル。眞如堂ノ徒衆參ジテ唱和ス。此後上人鎌倉光明寺ニ移シ行ハレテヨリ毎年ノ規式トシテ十日十夜ノ常行不斷ノ念佛今ニタエズ（十夜縁起）

とある。しかしこの念佛の樂器として雲板、大太鼓、双盤を用いることや、双盤の打ち方、「六字づめ」といわれる念佛の曲調等すべて六齋念佛の「眞光朗」からの發展で、これを常行堂の引聲念佛とすることはできないのである。

六齋念佛は以上のように京都周邊の空也堂系、干菜寺系が一般に知られておるが、これだけを見てはこれが融通念佛とのつながりがあることはとうてい想像もつかないであろう。ところがこれを私が高野山系と名づける紀州大和に分布する六齋念佛と比較すると、これらも融通念佛からの發展であることがあきらかとなるのである。もつとも大和は奈良附近までは京都の影響があつて双盤を打つ鉦講念佛があり、高野山系と交錯することを注意しておきたい。そして一々の六齋念佛の内容や形態は各論でのべることとして、高野山系の一般的形態を概觀してこれがいかに融通念佛の要素をもつかを指摘しておくこととする。

紀州大和の六齋念佛は大體眞言宗の檀徒の構成する念佛講によつて保存されているが、一部は融通念佛宗の檀徒の六齋講によつても保存されている。紀州では高野山周邊の舊高野領の村々、たとえば天野、花園、富貴等であり、大和では五條の周邊に多い。大和盆地の六齋念佛はほとんど融通念佛宗で山間部の山邊郡、生駒郡なども同宗である。

しかし融通念佛宗本山および寺院はほとんどこれに關與せず、むしろ眞言宗の矢田寺（金剛山寺）がその本寺とされておるのは注意を要する。これが融通念佛宗團によつて管理されておるならば、この宗派の成立と關係があるといいうるかもしれないが、その關係はまつたくないばかりか、眞言宗側に融通念佛の特色がつよいのは、この念佛が宗派をこえた民俗的念佛として保存されてきたことをしめすものであろう。そしてこの念佛をおこなう念佛講または六齋講は村落組織とつよく結合しており、戸主の强制加入か特定の舊家筋の世襲である。これをおこなう日時は定期的には大體二月の涅槃、春秋二季彼岸、盆（棚念佛と送り念佛）および十夜で、臨時には葬式となつているのが普通である。おこなう場所は講員の家を廻る廻り宿でする場合と寺や堂でする場合、墓地や葬家でする場合とがある。これは普通講を「ケイゲ（經營）る」とよばれる。念佛講には大てい講の財産として田畠山林があつてその得米で維持され、臨時には盆の棚經や葬式の布施があつたが、今は村からまとめて講に米を支給するところが多くなつた。

六齋念佛の曲名は普通四遍、白舞、阪東、總下し、新白舞、眞光朗の六曲であるが、その名稱も訛つてよばれ、文字もまちまちである。これだけの曲が眞光朗の鉦打やまれに挿入された讃や歌念佛をのぞけば、すべて南無阿彌陀佛の六字に曲譜をつけた念佛の詠唱で、それぞれの曲に百遍乃至百五十遍の念佛がくりかえされる。一つ一つの南無阿彌陀佛には原則として全部異る曲譜がつけられており、そのヴァリエーションの妙はまことにおどろくばかりである。一節一節のなかにソナタ形式の調和と展開があり、全曲にもソナタ形式の組合せがかんがえられている。というのは六曲のうちでもつともオリジナルな曲は四遍と白舞と阪東と總下しとおもわれるが、それぞれテンポの變化と莊重、輕快、勇壯の調子がある。四遍は四拍子の緩徐調の曲で莊重哀婉の氣分がみなぎつており、法會では本尊の前で詠唱され、葬式では棺の前でとなえられる。聲明的要素と朗詠調がよく調和された曲で六齋念佛の性格をもつともよ

くあらわしている。四遍は師遍と書くところ、シシン・シオンと訛るところなどがあるが、南無阿彌陀佛四句を一節とすることから名付けられたものとおもう。これに下し（通しとも奥ともいう）がつけばテンポがすこし早くなつて次の白舞のモティーフが出る。白舞は三拍子の行進曲風の曲で輕快優美の氣分がする。盆の棚經や葬式の門念佛や墓念佛にとなえられ、もとは墓地までの葬送行進曲に用いられたものであるらしい。これをきけば亡者も極樂へいそぐ氣分になるものだといいつたえられている。白舞は白米の字をあてるところが多いが、京都の干菜寺光福寺藏「淨土常修六齋念佛興起」に白毫米とかかれているので、もとは白毫舞であつたろう。これは拾遺往生傳の良忍傳に「年來修二白毫觀一」とあることから想像して、白毫觀をテーマに舞曲すなわち念佛踊の曲を作曲したものかも知れない。この曲は輕快で唱えやすいのでくずれた六齋念佛のなかにも割合よくのこつており、十繰念佛などといつて短かくして盆の棚經にとなえるところもある。阪東の曲はおそらく關東の踊念佛の曲がもととなつて作曲されたためにこの名があるのであろう。淨土眞宗でも現在報恩講の結願法要にとなえる阪東念佛に多少、この調子がのこり、體を搖つて踊りの身振りをする。(註11) とにかく勇壯活潑な舞踏曲で、葬式には墓地で埋葬のときとなえられるので穴入念佛などともいう。おそらく墓穴又は塚をめぐつて死靈鎭送の呪的舞踊がおこなわれたのを、洗練された舞踏曲に作曲したものとおもう。白舞の曲にも融通念佛南無阿彌陀佛のリフレインがつくところもあるが、阪東には例外なしに融通節があり、六齋念佛の中の名所となつている。紀州花園村新子の六齋念佛は融通念佛とよばれているが、これは阪東一曲だけなのでこのようによばれたのである。この融通節は六齋念佛と融通念佛をむすぶもつともはつきりした證據で、高野山の勢力範圍にこれがのこつている事實は、これが後世の作爲でくわえられたものではなく、六齋念佛には否定しえないまでに本質的な部分であつたとかんがえざるをえないのである。すなわち六齋念佛の曲調は良忍當時のままとはい

えぬまでも、それに近い形で六齋念佛のなかにうけつがれており、これを持齋の形でおこなわしめたのが六齋念佛ではなかつたかとおもう。そして高野山系の六齋念佛をきくとき、そこには藤原文化の特色たる宗教性ゆたかなセンチメンタリズムと優婉を志向する耽美主義の雰圍氣を感じとることができるばかりでなく、良忍の聲明史上の業績たる聲明調に朗詠調をくわえた混然たる調和が感じられる。總下しは四遍、白舞、阪東の「下し」の部分を組曲にしたものであるだけに、もつとも變化にとんだ曲であり、緩急長短の組合せの妙を發輝する。そして以上四曲をもつてソナタ形式を構成したものと推定されるのである。なお新白舞（または新阪東）および眞光朗は後世の附加物とかんがえられるが、新白舞は白舞に變化をつけて讃をくわえたものであり、眞光朗は名稱の起源は不明であるが、讃と鉦の曲打と念佛詠唱を合せた技巧的なものであるから、新奇と技巧をよろこんだ後世のもので、これが太鼓や双盤を加える藝能的六齋念佛に轉化する端緒をなしたものであろう。しかしその技巧性もひかえ目のもので、鉦の打ち方の「鉦そそり」や「地廻り」、「高まり」と「低まり」など室町以前の氣分があるといえる。なお六齋念佛全體の念佛詠唱はすべて一節ごとに一人の調聲（調子とも導師ともよばれる）の獨唱のあとに數人もしくは十數人の平（脇とも付とも側ともよばれる）が合唱をつけてゆくのであつて、調聲と平のあいだに懸け合がおこなわれたり輪唱することもあり、江戸時代に融通念佛を懸け念佛とよんだ理由もここにあつたかとおもわれる。(註12)

以上のべたように六齋念佛には融通念佛に關係ある部分がいくつか指摘され、これをもつて融通念佛が念佛詠唱をともなうものであつたこと、そしてその意味で良忍とふかい關係のあることが理解されるであろう。これは融通念佛が大念佛となつて俗化、藝能化したために、その改革運動、復古運動として六齋念佛が發生したとすれば當然かんがえられることで、われわれはすでに不明に歸した融通念佛を、現存民俗資料としての六齋念佛を通してあきらかにす

る道がひらかれたとおもう。

（註1）　元亨釋書、音藝志、念佛の條

（註2）　この如法念佛は融通念佛宗制定の彌陀所傳融通妙宗課誦にある九品念佛であるが、元祿十五年に融觀によつて制定され、平野融通念佛宗本山執事貞松院によつて印行されたもので、はたしてもと何によつたかはあきらかでない。それゆえこれを良忍作曲のままのこされた融通念佛とかんがえることは不可能であろう。むしろ天台宗の如法念佛作法の八句念佛からとつたのではないかとおもわれる。この八句念佛は「正修念佛所謂若立若坐一心稱念」とあり甲念佛八句、乙念佛八句でそれぞれ調聲一句に同音七句をとなえる。この形式はおそらく詠唱念佛のもつとも根源的な形とおもわれ、融通念佛、六齋念佛もこれを踏襲して複雜な變化をあたえたもののようである。しかしこれを三輩九品に配し、九句、六句、三句に詠唱するのは別な解釋から出ているとおもわれる。

（註3）　愛知縣北設樂郡設樂町の田峯、松戸、大名倉等にあり、六齋念佛の四遍の一部と白舞の一部（せいがんじ）と歌念佛をとなえる。しかし隣接の鳳來町ではこれと同系の盆念佛を大念佛とよんでおり、これがすこしくずれた形では北設樂郡、南設樂郡一帶に分布している。

（註4）　看聞御記や謠曲や七十一番職人盡歌合に出るので南北朝時代ごろには放浪の藝能者としてあらわれたのであろう。「こきりこ」をもち水杓と竹笹を腰につけて舞つた禪宗系の藝能者とかんがえられているが、改邪鈔では念佛系の遁世聖が同樣の姿であつたことをのべている。すなわち「コレニヨリテ世法を放呵スルスガタトオボシクテ、裳無衣ヲ著シ黑袈裟ヲモチヰル歟、ハナハダシカルベカラズ。（中略）當世都鄙ニ流布シテ遁世者ト號スルハ多分一遍房他阿彌陀佛等ノ門人ヲイフ歟」とある。近世では手品、物眞似等を大道藝としておこない、非人階級としてあつかわれたが、これが念佛藝能の段階にあるあいだは地方の農民たちにこの藝能を傳える文化人としてあつかわれたであろう。

（註5）　奈良縣史蹟名勝天然記念物調査報告　第五輯

新堂院棟上　弘安七年季甲申七月二日
法隆寺新堂院　勸進聖人圓覺　大工橘國輝

（註6）藤原信實の「今物語」に
或時に念佛にて祈りて見むとて蓮花谷のひじり三四十人計りめぐりゐて此入道を中にすゑて念佛をせめふせて申したるに」
とあり念佛でめぐつて祈りふせることが見える。

（註7）紀伊續風土記　第五輯　高野山之部、非事吏事歴

（註8）高野山寶簡集三十七卷

（註9）淨土常修六齋念佛興起の奥跋に
「余齡を悟り弟子等に爾來六齋念佛術熟を傳れどもいまだ奥旨を傳ず、因茲傳授書を附屬して委に空察に授與せしめ、烏兎順環すとゆへども法猶一器寫瓶なり」
として年時を
「正和三甲寅天季夏廿一日
六齋念佛開宗法如判
弟子授與　空察江」
とあり、信ずることはできない。

（註10）右の緣起の書繼の形式で、「書功」とし天文年中、天正年中のことを書き、最後に
「天下秀吉空心へ感有りて文祿年中に東川原除地へ光福寺を移し干菜山と號し六齋念佛修する輩の支配許す
正判免狀有り。其恩謝として例六月廿五日毎に大齋會執行なり
今度此寺内へ書院を建、庭に山水の景（を寫）し、内殿に釋迦の木像を寄附す。爰に此寺の記錄を披見に右寺格依レ無ニ

相違一　遂二書功一畢

天和二壬戌載二月二日

小野牛皮曼荼羅寺

隨心院門跡　大僧正　俊海三十三歳（花押）

六齋念佛惣本寺

光福寺　正慶江」

（註11）　阪東念佛は本願寺では蓮如上人が船にゆられながらとなえた念佛と説明しているが、初期眞宗教團の法要に關東の踊念佛が混入するのはむしろ自然であつたろう。

（註12）　鹽尻、卷六に融通念佛（善光寺系）をかけ念佛とよんでいる。

四、大念佛・六齋念佛の諸形態――奈良縣・和歌山縣を中心として

大念佛・六齋念佛の諸形態は種々雜多であり、その形態に地域的な相違がみとめられるので、まず分布の問題を論ずべきであるが、紙面の都合で別稿にゆずることとし、ここでは比較的原型に近い近畿地方のみをあげることとした。しかしその近畿地方の大念佛・六齋念佛も全部をあげることは困難であるため、融通念佛から大念佛・六齋念佛につながる系譜をもつともよくしめすような奈良縣・和歌山縣の例だけをとりあげた。したがつて近畿地方の他の地域や東海地方、關東地方、東北地方、中國四國地方、九州地方等の大念佛や六齋念佛については稿をあらためて發表するつもりである。

一、奈良縣北部

近畿地方はわが國中世文化の中心であり、また念佛文化の發祥地でもあつただけに民間に殘留した民俗的念佛も多く、その形態にも注意すべきものがすくなくない。大念佛については大和河內には融通念佛宗の寺院が多く分布し、その本山は大念佛寺であり末寺にも六齋寺（斑鳩町龍田）があるから、大念佛や六齋念佛があつたであろうが、現在はその檀徒のあいだに六齋念佛がわずかに殘存しているにすぎない。大念佛寺の日課勤行に宗祖良忍上人正傳と稱する融通如法念佛があるが、これは天台宗の如法念佛作法をもととした九品念佛であろう。しかし大和南部と紀州には高野山系の六齋念佛が多數のこつていて研究にきわめて好適である。奈良市附近は高野山系の六齋念佛と淨土宗系の鉦講念佛と空也堂系の隔夜念佛等が混じているが、新しく奈良市に編入された舊大安寺村には高野山系の六齋念佛がかなりよく保存されている。また奈良市西九條、佐紀東町、紀寺町、瓦町、藤之木町にも簡單な六齋念佛がのこつており、鳴川町德融寺には鉦講念佛（八丁鉦）がある。生駒では上村と乙田と小瀨にこの念佛がある。郡山市附近には東安堵にかなりよく保存されたものがあるが、その他西安堵、市場、三橋、柏木、長安寺、額田部、岡崎、今國府、横田、小林、北之庄、下永等には最近までおこなわれていたにもかかわらず今はほとんど廢滅した。山邊郡では都介野村白石にあるが末調査である。したがつて奈良縣北部の代表として次に大安寺六齋念佛と東安堵六齋念佛をあげることとする。

大安寺六齋念佛　ここは融通念佛宗の融福寺檀徒であるが東西二組の六齋念佛講がある。東組は楠木淺治郎氏（八八歳）中島友三氏（七五歳）以下十人、西組は木村才治郎氏（八一歳）大西惣吉氏（七八歳）以下九人の講員があり中老以上である。その傳承する曲はシシン（四遍）白舞、阪東、總下し、融通の五曲であるが、融通は和讃のみである。しかし總下しをつたえるところはここのほかに二箇所しかないので貴重である。念佛の節付もかなり正確で、奈

良縣南部の葛城村東佐味や高野山麓の天野村ともよく共通する。これは大安寺六齋が高野山系につながることを暗示するものであるが、大安寺村が融通念佛宗になつたのは元祿以後のことで、それ以前は眞言宗であり、元祿以前からこの念佛が存在したことは鉦の銘でもあきらかなのである。また盆の棚念佛にとなえる阪東の歌念佛には「高野のぼり」があることも高野山系であることを暗示する。これは奈良縣北部の六齋念佛の本寺が眞言宗の矢田寺（金剛山寺）であつたことと關係があろう。鉦の銘の古いものには一、慶安元年　二、承應二年　三、萬治二年　四、寛文十二年　五、天明七年等があるが、(註1)元祿以前のものが多いところからこの念佛は融通念佛宗成立以前から存在したことがあきらかで、想像すれば六齋念佛のある村が融通念佛宗に吸收されたのでないかとおもわれる。なお寛文十二年の鉦の銘に寄進者となつている上田勝兵衛は大和四十八組の六齋講中に五丁ずつの念佛鉦を寄進したものといわれ、當時大和には四十八組の六齋があつたのである。

この念佛講の記錄には大和六齋念佛講中が本寺とあおぐ矢田寺の免許狀がある。しかし文化十四年以前のものが見出せないのは何か事情があるのかもしれない。すなわち文化十四年、嘉永三年、萬延元年、明治二年、明治二十三年、大正九年のものまであり、ほぼ同文である。一例をあげれば

六齋念佛許狀

夫當山本尊地藏大菩薩者二佛中間之導師六道能化拔苦與樂之大慈悲尊也
斯六齋念佛者表六波羅密現當二世之大功德也仰願者一心於本尊前唱念佛現世者息災延命當來者得佛果何疑矣不可有
之依而祈請如件
文化十四丁丑歲八月十二日

格式之通上鑑受納所　矢田山金剛山寺
別當　北僧坊　㊞

大安寺村念佛講中[註2]

この念佛講が定期的に六齋念佛を奉唱する日時は春秋彼岸と盆の三回であるがもとは涅槃と十夜にもおこなつた。春彼岸入りの日には東西別々に講員の當番を宿として五曲全部をとなえ、秋彼岸中日には寺と墓地で東西兩組一緒にシシン（四遍）白舞、阪東をとなえる。なにゆえかこの講は秋彼岸をとくに重んずる風がある。盆には七日から九日まで東西別々にそれぞれの村中の新佛の棚をまわつて棚念佛をつとめる。このときは白舞（頭一段と尻三段に省略）と阪東（頭二段と尻二段に省略）[註3]をとなえ、十三日夕方には東西合同で墓地で迎え念佛を、十五日夕方には送り念佛を阪東でとなえる。大安寺墓地は行基のはじめたと信じられる格の高い墓地で石鳥居を有するが、念佛は送り場の側の行基菩薩の碑の前でとなえるのである。しかし盆のもつとも重なる行事は村中まわる棚念佛の方で、十四日の晩に東西兩組それぞれ四五人一組の二班にわかれて村中の盆棚全部をまわる。これを「棚の内まいり」というが、近頃は戸數がふえて東組百戸、西組百二十戸ほどなので、午前中からまわらねばならぬほどである。念佛は白舞の頭一段と尻三段、阪東の頭二段と尻二段であり、一戸五分位を要する。このとき阪東の歌念佛（三段と四段）の十三佛に「高野のぼり」をくわえるのであるが、この文句も訛りがあるらしく意味がとれない。[註4]

高野へのぼりて奥の院まいれば
右や左のかたすそなるらん
みなこれござるは　ごらいくつなさるる

ナマイダー　ナンマイダー　ナムアーイダー

またこの念佛講は盆に七墓まいりと矢田のぼりをした。矢田のぼりは毎年ではなく、大和南部の六齋講の高野のぼりにあたるようで、矢田のぼりの前は高野のぼりだつたろうとおもう。これが矢田の免許状が文化以前に見出せない理由かも知れないのである。矢田のぼりには地藏尊の前で六齋を奉唱して免許状をうけた。これは六齋講が他村へ出て布施をうけることがあつたので鑑札のいみで必要があつたらしいが、このために念佛の曲譜も自己流を入れずに割合よく保存されたのではないかとおもう。矢田寺はいうまでもなく大和一圓の納骨所として有名で、高野山にたいする地方的靈場であり、念佛のみならず北僧坊は生花の免許もしていたのである。また七墓めぐりは京都の空也僧の五墓または七墓めぐり、淨瑠璃賀古教信七墓廻にあるように大阪の七墓めぐりなどがよく知られているが、大和の六齋念佛講の傳承にもかなり多い。これは六齋念佛の鎮送呪術的性格をよくしめすもので注意せねばならないが、七墓めぐりは石鳥居のある墓地七個所の中央の五輪塔の前でこの念佛をあげるといい、これは行基墓に關係があるらしい。しかし宇智郡誌によると野原村の墓は「最初墓」の一で弘法大師が一郡に七墓ずつ加持してあるいた墓であるとされ、ここにも高野山につながる傳承が見出されるのである。大安寺ではしかしもう五十年位前まで毎年おこなわれただけで絶えており、老人の記憶で大安寺墓地、辰市墓地、北之庄墓地などで方々の六齋講と鉢合せしたことや、墓守にお禮の金一封をわたしたことなぞが聞かれるだけである。しかしこの傳統は現在念佛講（詠歌講）の老婆たちが盆月のあいだに石鳥居のある七墓をめぐつて線香と御詠歌和讃をあげる民俗として大和、河内の各地にのこつている。

またこの講は毎月の念佛講を講員廻り宿でおこなうが、これが月の十五日に念佛講をいとなんだ名殘りであろう。日は一定せず適當な日にあつまり共同の食事をとる。その費用は戰前までは五六反の寄進田の年貢米でまかなわれた

が、今は盆の棚念佛と葬式の布施によつている。このときは念佛は五曲全部を奉唱し六齋講の過去帳（寄進者の戒名をかいた掛軸）を床の間にかける。

次に臨時の念佛奉唱として葬式がある。葬式全般の世話は今は村の農業協同組合がおこなうようになつておるが、もとは葬儀も墓地も六齋講の管理であつた。通夜には老人の詠歌和讃と百萬遍念佛であるが、葬式當日はシシン、白舞、阪東、總下し、融通の五曲全部を正式に奉唱し、そのあいだ一回休憩があるだけである。また出棺には出鉦を講員が打つてシシンをとなえ、墓についてから白舞の頭一段と尻二段をとなえる。これは三十五日の忌明け法事のときも同樣である。葬式はすべて東西兩組別々におこない、不幸のあつた家から講に通知があれば月當番がすぐ鉦を打つて知らせ、講員は田からでもすぐあつまつて葬式の相談をした。また他村から葬式の依頼があれば念佛をとなえに行つたが、よくたのまれたのは奈良の町家からであつたという。寛文十二年の五丁鉦の寄進もそのような緣故からかもしれない。

つぎにこの六齋講と墓地の關係は密接で、墓地の管理權はすべて講がにぎつていた。最近まで盆彼岸の墓地の草刈や輿（棺臺）の貸出しから修繕まで講の仕事であつた。(註5) この講の記錄に寛政十二年の墓地管理に關する文書があり、その支配は興福寺大乘院門跡からあおいでいる。(註6) また文化五年の「こしふせ覺書」があり、六齋講が輿の貸賃として布施をうけていたことをうかがわしめる。(註7) また慶應三年四月に念佛講に田地が寄進された文書もある。(註8)

尙大安寺六齋念佛の講員となる家は大體舊家で家筋がきまつておつたという。しかし寛政十二年の文書では東方の講中で二十二人の名が見られるから、大體村の土着の農民をほとんど包含しておつたのではないかとおもわれる。もつとも六齋念佛の講員の數を二十二人とする例は大和紀州に多いので、何か意味があつたのかもしれない。現在の東

西十九戸の講員は親のあとは長男がこれに代るので、その家筋は大體固定しているようである。

東安堵六齋念佛　奈良縣生駒郡安堵村には東安堵と西安堵と岡崎に六齋念佛があつたが、今は東安堵のみが春秋彼岸と盆と十夜に大寶寺（融通念佛宗）にあつまつてこれをつづけている。この附近の郡山市小泉市場（舊片桐村）同横田（舊治道村）同小林（舊片桐村）本多村今國府、平端村長安寺、同額田部、川西村下永等にも戰前はあつたが鉦の供出で絶え、横田の場合は警察の干渉でやめたという。額田部だけが盆に形ばかりの念佛をとなえ、岡崎には六齋講のみあつて念佛はうしなわれてしまつたが、葬式の管理だけはつづけている狀態である。この中にあつて東安堵だけはシセン（四遍）白舞、新阪東、融通の四曲をのこしている。白舞は割合よくのこつているがシセンは簡單であり、新阪東は阪東の歌念佛が發達して十三佛の歌（ほとけのしだいをかたるよ以下）と二十五菩來迎和讃の一部をとなえ、簡單ながら融通節がついている。融通は大安寺とおなじく來迎和讃と無常和讃の混合で、[註9]ここの六齋念佛は歌念佛へのつよい傾斜をしめしている。

ここの六齋念佛の創始者または中興者として長治郎なる人物の名が記憶されており、その墓と稱する小五輪が大寶寺境内の富本氏（陶藝家の富本憲吉氏實家）の株墓の隅にある。毎年六齋講は盆にこの長次郎墓へ詣ることになつているので、個人の墓地内では都合がわるいといつて講の墓地に明治四十五年にまた長次郎の墓をたててまつつている。その生存年代は大寶寺が享保十三年に建立されたとき、その家が寺の隅にあつたというから、このときをさかのぼることあまり古くはないらしい。ことによると六齋念佛の長次郎の庵が融通念佛宗の寺に發展したのかもしれない。長次郎は六齋念佛に熱心であつたのでその田畠を講に寄進し、明治に入つてからこれを賣つた金百圓の利子で講をいとなんで來たという。講員は現在十一人あるが希望者のみの加入なので增減があり一定しない。毎月輪番であつ

まり會食して念佛をあげる。そのときかける本尊は中央に三界萬靈と書きその周圍に過去の講員の戒名又は俗名をかいた掛軸である。講をいとなむ日は一月は五日から七日の間で新年宴會程度、二月は涅槃の二月十五日、三月は彼岸中日で五日間位練習がある。四月は十五日の法隆寺聖靈會、五月は平野大念佛寺の萬部會、六月七月は休みで八月の盆には十三日に墓詣り念佛、十四日に盆棚詣り、九月は秋の彼岸の中日、十月の十夜は十一月におこない、十二月十七日は長次郎の命日で供養の念佛がある。盆棚詣りは檀徒廻りともいい、十四日の朝六時頃大寶寺に集り、佛前で念佛をあげてから講員二組に分れて新佛のある家もない家も全部大寶寺檀中百二十軒をまわる。服裝は普段着（帷衣）で前に鉦を下げ輪袈裟をかけ白足袋をはく。となえるのは新阪東である。また盆の十七日に七墓めぐりをおこなう。その場所は安堵、結崎、額田部（長安寺とほか一箇所）郡山（丸山と二木）奈良（二箇所）の七箇所の墓であるが奈良は一定していない。奈良で慰勞の食事をしてかえる。念佛はそれぞれ六地藏の前で新阪東一繰りだけをとなえる。七墓めぐりの墓はムセヤといわれる火葬場のあるところと言うから、精進墓すなわち詣り墓だつたのかもしれない。この近くの村でも二三十年前までは皆七墓めぐりをしていたという。

葬式には棺の前でシセン、白舞、新阪東、融通回向の全部、庭で新阪東、途中の地藏の前で新阪東二繰りほど、墓では燒香のとき新阪東全部をとなえる。このあたりは單墓制土葬なので百カ日までにケコツ（毛髪）と餓鬼の辨當をもつて矢田寺へ納骨にゆく風がある。講の財産は戰前まで長次郎寄進の田畠を處分した預金があり、また村から初穗をあつめていたが、その代りとして村から十圓（當時米六斗にあたる）の補助があつた。盆の棚念佛の布施は一戸三十圓乃至百圓位、葬式の布施は役僧並で仕上げ念佛も布施をもらう。

ここの六齋念佛のシセンは十七節あり、白舞は十二節と七節は新阪東と同じであるが平は異る。十節目にアマエ節

が若干ある。新阪東は九節で回向文がつくが曲調は阪東と同じで歌念佛があり融通節がついている。(註10)

二、高野山周邊

以上のような奈良縣北部の六齋念佛にたいして南部にはもつととのつた六齋念佛があるが、これは高野山系のものであるので先ず高野山周邊のものからのべることとする。高野山周邊に何故六齋念佛が多いかはすでにのべたが、高野山が平安末期から鎌倉時代にかけてわが國念佛の一中心であつたことは事實で、この念佛の管理者は高野聖であつた。高野聖は隱遁の念佛三昧と回國の念佛勸進の二つの生活形態があつた。その流派に明遍の蓮花谷聖と覺心の萱堂聖および踊念佛の時宗聖があつたが、結局時宗聖によつて統一されたらしい。一遍聖繪によれば一遍上人が高野山に登つたのは文永十一年で、この年に一遍は熊野で「融通念佛すゝむるひじり」とよばれたのであるから、融通念佛の影響をこの山にのこしたのは當然であろう。また後にのぼつた時宗の徒のなかにも時宗の行儀として融通念佛的なものがあつたであろうし、またこの山の念佛聖に影響力の大きかつた新別所專修往生院の創立者、俊重房重源の不斷念佛に融通念佛または大念佛的な色彩の見られることはすでにのべた通りである。一遍が高野山へのぼつた動機もこの山に念佛がさかんであつたからであつて、聖繪に

天王寺より高野山へ參給へり。此山は（中略）又六字名號の印板をとゞめて五濁常設の本尊としたまへり。是によりてかの三地薩埵（弘法大師）の垂迹の地をとびらひ、九品淨土同生の緣をむすばん爲にはるかに分入たまひけるにこそ」

とのべ、高野淨土信仰と弘法大師六字名號の印板があつたことをしるしているが、この名號印板は近世まで高野聖

の廻國勸化にもちいられたものであつた。鎌倉末期に融通念佛中興の祖法明上人がこの山にのぼり修行時代を長福院に止住したことは、この山の念佛のなかに融通念佛的なものの混入を暗示するものであろう。慶長年間の賴慶勸化牒に「六字稱名は明遍より起り鉦鼓を鳴し聲を出すは一遍より始る」とある一遍の鉦鼓と高聲の念佛にも融通念佛の念佛詠唱が想像されるのである。しかし南北朝時代の高野山教學復古運動と念佛壓迫、慶長元和頃の遍照光院賴慶による念佛の眞言歸入運動のために、高野山上には念佛の跡を絕つたが、その影響は周邊の寺領内にのこり、交通不便な村に大念佛または六齋念佛の形で殘存したものと推定される。すなわち高野山周邊には天野村上天野の大念佛と下天野の六齋念佛、花園村峯手の六齋念佛と新子の融通念佛、高野町上湯川および花阪の六齋念佛、富貴村上筒香の六齋念佛、河根村古澤の六齋念佛があり、大和の五條市周邊には岡、北山、久留野、小和、近內、住川、居傳、東佐味等の六齋念佛がもつとも古い形としてのこつている。次にその代表的なものをのべてみよう。(註11)

天野大念佛および六齋念佛　和歌山縣伊都郡天野村（現見好村）は高野山ともつとも關係のふかい村で、高野山の地主神、天野丹生津比賣神社の所在地である。御手印緣起によると弘法大師は一獵師の導きで高野山に入り、丹生津比賣大神の神領萬許町を寺領として高野山を開創したという。そのため高野山の天野神社崇敬は比叡山の山王日吉神社よりもふかく、神宮寺として曼荼羅院や大庵室、山王院等の伽藍をたて、天野八講以下の大法會をおこし、供僧をおいて奉仕せしめた。また冬期の寒冷を避けるために高野山僧はこの村に里坊をかまえて止住し、中世の半僧半俗の念佛聖たちも女人禁制結界外のこの地に妻子をたくわえていたようである。(註12) また高野參拜路もこの地をよぎる尾根道がもつともながく用いられたから、山僧のみならず參拜者の足溜となり、門前町あるいは宗教的村落としてさかえた。近世には高野山の寺領となり花王院・彌勒院等が地頭としてこの地を支配し、六齋念佛もこの地頭寺院の監督下

におかれた。このような歴史から見てこの村が高野山の文化的影響をうけるのは當然であり、この地の民俗には高野山の沈降文化の殘留がすくなくないのである。したがつて中世高野の念佛が殘存する可能性はもつともつよいわけであるが、現在ここには大念佛講と六齋念佛講があつて、念佛の曲譜も聲明調のつよい古い型がのこつている。また念佛に關する記録もかなり多く、こゝの六齋念佛が高野山の管理下におかれたことも分るから、ここの六齋念佛が變化衰退しにくかつた大きな原因を知ることができる。

上天野は天野神社の近くにあり、もとは神主、宮仕、供僧など神社關係者のみで農民はなかつたが、明治以後ほとんど全部歸農し百姓になつている。ここの大念佛講は下天野の農民のみによる六齋念佛講に相當するもので、全戸が加入していたが、今は希望者のみ五人(阪本・芝崎・小川・表谷・東山の諸氏)である。次にあげる丹生相見家(二ノ祝)の藏する大念佛免許の文書は、丹生相見のみは一向に死穢をきらう家であるから、大念佛勤仕を免除する意味の地頭坊の許可狀で、その他はおそらく惣神主家(一ノ祝)をのぞいて全戸大念佛講に加入しておつたものと推定される。

大念佛免許

(袖裏)享保十四年己酉七月大念佛之儀ニ付三ヶ村及双論依之村中不殘罷出相勤候樣に被仰付候節各別ニ相見江被仰下候書付

山王堂相勤義不出證文

覺

一、上天野村之内三ヶ村大念佛講之儀、近年諸事猥ニ相成候ニ付、往古之通銘々罷出嚴密ニ相勤候樣ニ申渡候之處、其元茂古來より出不來、殊更死穢一向相嫌家ニ候之間、自今以後も山王堂江罷出相勤申義致用捨候樣ニ被願出之候、依之今般願之通令了智(ママ)候　已上

心南院納所 南來

享保十四年酉十一月十五日

丹生相見

この大念佛講は講員の家を廻り宿として二月十五日の涅槃の日と盆の十四日に涅槃圖をかけて念佛をとなえるが、念佛の節はなくいわゆる團子念佛である。もとは優秀な地獄極樂圖があつたが四十年前に賣られて江戸初期の涅槃圖をのこすのみで、講としては廢亡一歩手前の狀態である。(註13)

講の當日は光明眞言、釋迦眞言、不動眞言、十三佛名と團子念佛をとなえ、終つて酒肴が出る。この講は葬式につとめぬのが特色でもとは山王堂でつとめたらしい。丹生宮御鎭座由緒並社地伽藍名所記(天保三壬辰十一月冬至執筆十矢上之坊遙見)によれば

七月七日ヨリ十五日ニ至テ白川法皇ノ勅願ニ依テ村內之俗人大念佛トテ阿彌陀經讀誦ス。其時小野篁自筆十王ノ繪像六幅祭ル。又念佛ヲドリト云事アリ。

十月晦日念佛會トテ行人幷社僧立合ニテ法事在リ。是又禪定法皇ノ勅願ナリ

とあり、もと念佛踊のあつたことも明かである。(註14) しかし現在では上天野の小字每に齋講(とつこう)なるものがあり、念佛講の代理として葬式をつとめ、正月二十日の鉦はじめ、春秋彼岸中日、盆、師走十三日の鉦おさめに部落があつまつて節のない團子念佛をとなえ、葬式用の光明眞言曼荼羅、十三佛、大師像、膳箱、鉦、打敷、佛具、經帷衣、莫座、過去帳を所有する。また瀕死の病人のためには千卷心經と祕鍵をよみ、村內の戶主の死亡には初七日までに弔講をするなど、齋講は六齋念佛の衰退形態とおもわれる。

次に下天野の六齋念佛講は社人供僧たちの大念佛講にたいして農民の念佛講である點に特色がある。もと下天野八垣內から出た二十二人の講衆によつて講成されておつたことは、下天野六齋講帳の第一條に次の定書があることから

知られる。

下天野六齋講念佛　四遍　白昧、幡幢

西峯東峯茶尾引土垣內　八挺

下居細原垣內　七挺

谷口尾花垣內　七挺

延命寺親鐘　一挺

計二十三挺

覺

一、下天野村地頭六ケ院樣藏下組庄屋之內、社領庄屋、花王院庄屋、清淨心院庄屋、彌勒院庄屋右四人者六齋講中取締トして每歲五ヶ度齋經營之節、延命寺へ出席候事　是ヲ居念佛衆中ト相唱、其餘打鐘持參廿二人之衆を立念佛衆ト相唱、萬事願事或寄附筋或者爭論等出來候節者　立念佛中より居念佛衆江伺出　居念佛中之差圖ニ任　進退可有之事

すなわち監督役の庄屋筋四人の居念佛衆にたいして、實際に念佛するのは立念佛衆二十二人で鉦も二十二挺であった。また延命寺の親鐘（双盤）は念佛講の寄せ鐘でこれらの鉦はすべて高野山地頭寺院から下賜されたものであった。文久二年の六齋講記錄によると

奉訪處之六齋講者往古高野山御地頭ヨリ打鐘廿二挺被下置　于今無怠慢每歲五度之回向經營等相勤申所如件

于時文久二戌之年二月改

とあつてこの念佛が高野山の管理下にあつたことが知られる。

講員はもと戸主の壯年層であつて三十歳から四十歳までの中から順番に念佛頭が加入させ、それにつれて年寄が引退したといい、青年の六齋ではなく戸主層の六齋であつた。今もこの數にはかわりはないが念佛そのものの傳承者は四五名にすぎなくなつている。これは念佛の習得が非常にむずかしいからであるが、昔はその練習も嚴重であつて下天野六齋講帳の第二條には

一、念佛稽古之儀者立念佛之內高弟或者年老之人より新入未熟之者へ循々致教授候事。猶又三年目或者五年目ニハ必惣稽古可有之候、其節者居念佛中江願出、居念佛中より村役人申出シ村役人之差圖ニ任セ下天野村中惣ならし、或立念佛居念佛中之家別ならし、或延命寺ニおいて幾日之間稽古等　右者其時之臨機宜取斗可申事　尤惣ならし中間ならし等之節者下天野村中より助勢扶持トして家並ニ米一升づつ差出候事

とあり村役人居念佛衆の監督と村全體の助勢の中で念佛の傳習はおこなわれて來たのである。しかし現在の傳承者は谷口萬右衞門氏（七五歳）同傳市氏（四一歳）堂阪平四郎氏（六三歳）田和明治氏（五六歳）北遠太郎氏（五五歳）位となつている。またここにも部落（垣內）毎に齋講があり部落ごとの葬式をとりおこなうがその念佛は節のない團子念佛である。おそらくこれは六齋講の下部組織で部落毎の行事は齋講、村全體の行事は六齋講がうけもつたものとおもわれる。

この念佛講が念佛をとなえるのは二月十五日の涅槃、春秋二季彼岸の中日、盆、十夜の五回で舊七月十四日の盆棚回向に村まわりをするほかは菩提寺の延命寺にあつまつて庫裡でとなえた。(註15) 講のありさまについては下天野六齋講帳にくわしく、現在もほぼ同樣におこなわれている。(註16) そしてそれぞれの講の費用は文久二年の六齋講記錄にくわしく記

されている。このうちもつともの大役はやはり盆で七日から十三日まで延命寺で念佛したり、七日に寺の庭に高燈籠（八朔まであげておく）を立てて念佛廻向したり、新佛の盆棚（ソンジョダナ＝精靈棚）[註17]を十一日、十二日につくつたりした。十四日には午前から午後まで二組に分れて下天野全部の盆棚の念佛廻向（棚經）をしたが、今は新佛の棚だけ十三日、十四日のうちに廻向する。盆の棚經は三段通りといつて總下し、白舞、阪東である。盆の布施は新入講員の念佛練習（ナラシ）につかわれ、ナラシは延命寺の庫裡がやけてからは當番の庭（カド）に花蓆をしいてしたが、今は座敷に上つてする。

またこの六齋講は臨時のつとめとして葬式に念佛をあげる。僧侶の引導がすんで理趣經をあげている間に四遍と總下しをとなえ、墓に棺をうめるときに白舞と阪東をとなえる。白舞は門念佛にもとなえられ、これをきけば亡者も極樂へいそぐ氣持になるという。

六齋講の收入は盆と葬式の布施および六齋講に寄進された祠堂金の利子（月一分で貸付ける）で、もとは六畝の六齋田の年貢もあつた。これを年行事のまかないで年五回の講を經營する。しかしもとは地頭の高野山からの寄進米もあつて延寶八年の古文書（松本明夫氏藏）には

寄附狀之事

一、就下天野念佛講近年及退轉候爲以來相續今度八木五石令寄附之畢　然上者以此五石米慥成處ニ預置之此支分ニ而今迄如有來毎年二季之彼岸七月以上三度之念佛講永代無斷絶相勤之可被申者也　猶委別紙有之

干時延寶八庚申年極月廿一日　　心南院宥譽

とあり下天野六カ院地頭藏下庄屋中間黑箱有書目錄にも高野山寺院からの寄進覺がある。[註18] このような寄進はこの六齋念佛と高野とのつながりを證明するものであるが、村人の傳承としても六齋の師匠は高野山から來たといい、その時代は大和に朝廷があつたころ大和から來た人であるという。南北朝時代は丁度大念佛が六齋念佛に移行する時代でもあつたからこの傳承にはやや眞實性があるといえよう。そのほか黑箱には寶曆十一年、文化三年、文化六年、天保五年、嘉永六年の寄進目錄があり、これに見合う古文書（松本明夫氏藏）ものこつている。このようにして寄進された講財產は村中へ貸付けられ年二割乃至一割二分の利子をとつた古文書（松本明夫氏藏）が寬政元年、文化十年、天保四年、弘化三年の證文としてのこつている。また黑箱目錄には延寶八年から文久元年にいたる十三口の貸附米證文覺がある。

最後に下天野六齋念佛の特色はその曲譜がもつとも古い形でのこされておるということである。曲目は四遍、白舞、阪東、總下しの四曲であるが、古い聲明的要素がもつともよくのこつた六齋念佛として融通念佛とのつながりをおもわせる。しかも新しい六齋ほど歌念佛と民俗藝能的要素が多くなるが、これはそれがまつたくない。ただ阪東の九番に融通念佛南無阿彌陀佛を四回くりかえす融通節があるのが唯一の詞である。この點からもこれが融通念佛にもつとも近い古い形態とかんがえられるから是非保存すべきものとおもう。またこの念佛講は一般に「つぼ書」とよばれる念佛譜本を昭和六年に折本として印刷し、講員の練習に資しているが、その內容の說明は省略する。

花園村六齋念佛　和歌山縣伊都郡花園村は高野の南にあり有田川の上流谷合に細長くのびた村で、平安時代以來高野山とのつながりによつて存立して來たため高野山文化の殘留がきわめて多い。この村の梁瀨に峯手御念佛とも六齋

念佛ともよばれるものと新子に御念佛とも融通念佛ともよばれるものがあり、南垣内には角兵衛念佛とよばれる六齋念佛がある。峯手には師遍（四遍）十六番、白舞八番と釘念佛和讃がある。師遍の第十六番は御影向節ともおどり節ともよばれ、白舞の第八番の返しも御影向節である。念佛譜本がのこつているが正確に詠唱できる人はほとんどなくなつた。盆の十四日に寺の堂で先祖代々の廻向一座と新佛廻向一座をとなえてから新佛の盆棚をまわつた。新子の御念佛は阪東のみでこれを融通念佛というのは七番、九番、十番に融通念佛南無阿彌陀佛のくりかえしがあるからであろう。全部で十六番（十六節）あつてそれぞれに名稱がある。一番二番七番十五番は本調子といい、四番はシズカ、八番はナマリ、九番は融通前、十番は融通返し、十一番はナゲキ、十二番はオンアミダ、十三番は高調子、十四番は大ワスレ、十六番はヒジリである。八番と九番の間に歌念佛が入るが盆には「ほとけの上にも次第がござるよ」で靈佛をよみ、葬式には「夢かよ」を入れる。

夢かよ　夢かよ　一期は夢かよ

極樂の土産に何をもたしよ

南無阿彌陀佛の六字の名號

となえてまいろうよ　南無阿彌陀佛々々々々々

ここにも南無阿彌陀佛の聲の長短と鉦を入れる所とを示した簡單な譜本がある。念佛詠唱は盆と葬式のみで戸主全體の加入である。文書はほとんどないが大永六年の念佛講日記があり二十五戸の講員が列記され、これがおそらく全戸數であろうが、全部百文の寄進であるところに講員の平等な負擔で七月十五日の講がいとなまれたことを知るとともに、ここの念佛講が決して近世のものでないことを示す史料である。

念佛講日記之事　新村中

七月十五日念佛講之事

百文　サカカイト　百文　トウモト

百文　ヲウェイ　百文　ニシ

（中　略）

大永六年七月　日

また南垣内にも阪東があつて十九番である。ここでは十二番、十四番、十八番に融通念佛南無阿彌陀の融通節があり、十二番に藥師之入節がある。

よにん（女人か）の後生には　藥師をめさるる　藥師のほぞんは十三佛　二十五の菩薩は手に手を合せて　迎いにござるよ　南無阿彌陀々々々々

また團子念佛は七遍ずつ三度くりかえす。ここにも念佛本があり、また觀音堂には念佛由來書之事という享和三年の額板がある。[註19] これは享和元年より三年まで有中村（花園村の内）から師匠をまねいて念佛を練習したことを記したもので講中十三人、四十四歳より十四歳まであり青年壯年層であつたことが知られる。

上湯川六齋講および花阪六齋講　これは共に高野町に編入されたが山麓の村で、六齋念佛の詠唱はもうない。上湯川では現在盆や葬式年忌の念佛をつとめる團體を念佛講といい、その世話方を六齋頭というところからこれが六齋念佛講であつたことを知るのである。卽ちこの念佛講は盆の十四日に村中の盆棚を廻向してまわるが、その方式は心經、光明眞言、十三佛、お念佛などである。垣内の葬式には年長の六齋頭に告げると頭は念佛講員（これを六齋とも

よぶ）を集めハコサシ（棺作り）フシンド（穴掘り）高野買物などを交代でつとめさせる。これが六齋念佛講の本來のつとめであつたらしく天野の齋講や但馬城崎在の田結の齋衆などと同じ機能である。すなわちここでは念佛詠唱の節は失つたが機能はのこつたのである。

花阪では戰前まで念佛講が六齋念佛をとなえた。しかし念佛鉦の供出で絶えたのである。四遍、白舞、阪東の三曲があつた。この村の戸主全部が講員で葬式の世話方や出棺の門念佛をし、盆の十四日には家毎にこの念佛をとなえてまわつたという。この村には弘法大師三三昧の一といわれる古い埋め墓が高野山大門口の登道にあり、天野村からモチコシで埋めに來たほど有名な三昧である。これに對して村の大師堂と十王堂（弘法大師作の十王像あり）の周圍にムセ（詣り墓）があり典型的な兩墓制であるが、六齋念佛は埋め墓の方に對しておこなわれた。

三、奈良縣南部

奈良縣南部の五條市附近には眞言宗檀徒のあいだにひろく六齋念佛がおこなわれていたが、現在は五條市岡、近内、居傳、出屋敷、小和、住川、葛城村東佐味、伏見等にのこるのみである。しかし終戰前後までおこなわれていたのは五條市北山、久留野、葛城村高天等である。高天はこのあたりでの六齋念佛の中心だつたらしく高天念佛としてきこえていたが今は亡びた。しかし近内、東佐味の六齋は紀州天野、奈良市大安寺とならんでもつともよく保存されたものの一つであり、高野山系の六齋念佛として融通念佛とのつながりをしめす重要な民俗的念佛である。

近内六齋念佛　奈良縣五條市（舊北宇智村）近内は眞言宗で地福寺の檀徒である。講の本尊阿彌陀如來畫像には

元祿七申戊年七月十四日　近内念佛講中求之

とあり元祿時代にはすでに存在しておつたことがあきらかである。之は隣部落住川の六齋念佛位牌過去帳に元祿十五

年四月十五日とあるのとほぼ同じである。講員はもと二十二人であつたが現在は並井久吉氏（八四歳）以下十三人で、希望者の加入となつている。しかし大體世襲しておるのが普通で、並井氏は文化元年二月二十九日の位牌ある祖父の代から入つておるという。[註20] したがつて概して舊家のみで構成されている。並井氏の記憶するかぎりでは戸主層の壯年者が多かつたが義務加入ではなかつたという。この念佛講のつたえる曲目は四遍、白舞、阪東、眞光朗の四曲であるが並井氏の師匠辻本升治郎氏や長谷川久治郎氏のころまでは新白舞と總下しがあり、その「つぼ書」ものこつていた。練習はずいぶんはげしいもので師匠から叱られて二十二人の講員が減少した。また大正年代に講の年寄株で村の先覺者であつた玉井氏が時代に合う簡單なものにといつて新白舞と總下しを止めたという。この念佛講の年中行事として講をおこなうのは春秋彼岸と盆と十夜の四回で涅槃はない。彼岸と十夜には村の福德寺（眞言宗高野派、無住で地福寺の兼務）にあつまり、白舞と阪東をとなえ、參詣の村人にもお齋を出す。この米は村で各戸から集めて講中にわたすのである。盆には七日から十四日まで毎夜福德寺と天城寺（同上無住）で白舞と阪東をとなえ、十四日の朝から二組に分れて村内全部の盆棚をまわつて棚經をする。このときは白舞と阪東の「六遍繰り」[註21]である。ただし新佛の棚には阪東をもう一回餘分に廻向する。十五日の夜は「送り念佛」を墓の近くで道に立つてとなえるがこれも白舞と阪東である。彼岸、十夜、盆とも夜は講宿にあつまつて四遍をとなえてお齋をいただく。盆の七墓めぐりは今はないが、もとは河内の八尾の墓までも行つた。これは格の高い「ほんとう」の墓にまいるためだというから、大安寺六齋などの「鳥居のある」墓とか「行基菩薩のひらいた」墓などとおなじであるかも知れない。

この念佛講も村の葬式にはかならず出なければならないが、葬式の世話をすることはない。しかし講の當番が葬式のできたことを知らせる寄せ鉦をたたくとすぐ集るというから、もとは葬儀に發言權があつたものとおもう。葬式當

日は棺の前で四遍、白舞、阪東の三曲を全部通して奉唱する。この布施はその都度もらわぬ代り村からまとめて年間米七斗と金千圓がわたされる。これは貧富の差による布施の大小をなくすためにおこつたという。しかしもともと六齋講は村のものという觀念はどこでもあり、村を代表して祖靈鎭送をおこなうものであるから、村布施の方が古い形式ではないかとおもう。またこの六齋は他村からの依頼で大きな葬式に念佛をつとめることがあつた。これを「近内の念佛をもらう」といい五條や牧野へよく出た。このような場合は前夜から練習をつんでおかねばならなかつたが、近内村中のものが六齋についてゆけば全部御馳走になれるので一戸あたり二三人もつれて行つたことがあるという。これはそれほど大きな葬式でなければ雇われなかつたからであろう。また今は絶えたが年中行事として舊六月二十四日の蟲とむらい（蟲送り念佛）があつて村内を念佛してまわつた。

講の收入は寄進された田地の年貢と先にのべた村布施、および盆の棚經の布施五六千圓であるが講の田は戰後開放されて無い。講帳を見ると次のようにある。

土地寄附者

寺田村　森　藤平妻かめの

北宇智村大字近内共有地但し近内念佛講地

字鎌田　田壹畝拾貳歩

字〃　田五畝拾七歩

字〃　田參畝九歩

字〃　田六畝拾八歩

計壹反六畝貳拾五歩　參石四斗米

この小作料米貳石　作人　赤松　定吉

その他の寄附者

梶谷佐治郎　施主　梶谷千浪女

（中　略）

計五畝拾九歩　この小作料六斗三升

作人　西尾安太郎

田中　熊市

右土地近内念佛講へ供養のため寄附

近内六齋念佛の四遍は六遍繰りが八番、通しが八番で十六番ありこれに「申しまる」というやや急調の念佛を最後につける。もつとも嚴肅な念佛には六遍繰りと通しのほかに六・七・八番をくりかえして「申しまる」をつける。調聲が奉唱中にこの念佛は「通す」ことを平に知らせるためには六遍繰りの六番節を「ひねる」といつて變化をつける。なかなか細かい技巧であるが六番節は「張りぶし」といつて聲をはり上げ、通しの八番節は「踊りぶし」といつて念佛踊の調子がある。白舞は六遍繰り五番、通し八番あり、通しの場合は八番節の次に四番と五番をくりかえして「申しまる」をつける。また通す合圖には四番節と五番節をひねる。阪東は六遍繰り八番、通し十一番で五・六・七・八番までをくりかえして「申しまる」をつける。通す合圖のひねりは五番節である。この六遍繰りの五番節は一名「ぶんぶぶし」といわれナームアーミダーンブのブのくりかえしが目立つのでこの名がある。またあまり良い節なの

で五百文の褒美をもらつたので「五百ぶし」ともいう名所である。通しの一番節（普通九番という）六番節（普通十四番）七番節（普通十五番）十一番節（普通十九番）には融通念佛南無阿彌陀のくりかえしがある。もし盆の棚經で六遍繰りだけで通しを省くときはこの融通節は六遍繰りの方へ引上げてとなえられる。すなわち六遍繰りにも通しにも阪東は融通節がなければならぬのが注意すべき點である。また阪東の通しの八番節は歌念佛であるが訛りがあつて意味がとれない。

さーても尊とや　ありがたの事やぞ
念佛六字は　ごじそくなれど
功德の多さよ　南無阿彌陀ン佛

通しの九番節（普通十七番）は一名「あまえぶし」といつて幼兒が片言で親に甘えるような發聲をする。ナェバェーミダーをくりかえすのであるが阿彌陀如來に甘える意味よりも、この作曲がヴァリエーションにいかに苦心したかを示すものであろう。通しの十番節は一名「はしのこぶし」といい梯子をのぼるように音をきざむことから出ており、アレグロ・ヴィヴァーチェ風の勇壯なはね方をするので一層舞踊曲の感じが出るのである。

眞光朗は京都市近郊に二三あるが、大體奈良縣南部の六齋念佛の特色で鉦打の技功の妙を發揮するものである。はじめ金光明六齋功德經と阿彌陀經から一句ずつとつた讃をとなえ、そのあと念佛があつてから鉦打だけになり「たかまる」「ひくまる」「七ツ鐘」「打込み鐘」など四種の鉦の打ち方で念佛のしめやかさを急に陽氣にする。もちろんこれは六齋念佛になつてからの附加物にちがいないが、これに太鼓を加え、笛を入れると京都附近の曲打六齋になるのであつて、六齋念佛藝能化の發端をなすものといえる。この眞光朗が高野山と京都の中間に分布していることは興

味ふかいといわねばならぬ。眞光朗の曲名の起源は不明で、空也堂十二段念佛の閉（しころ）がこれにあたるとおもうがこの名の出所も全くわからないのである。

（お斷り）　大念佛・六齋念佛の分布、および大念佛・六齋念佛の諸形態の續稿は大谷學報に掲載の豫定である。

尙本稿の天野村六齋念佛に關する研究は文部省科學研究費の總合研究「近畿農山村の發達に關する歷史的民俗學的研究」の一部である。

（註1）　一、慶安元年子八月廿日　施主長右衞門天王越後守□□　大和國添上郡大安寺村爲妙林禪尼

二、承應二己九月十二日　奉寄進爲妙慶禪尼菩提　施主和州添上郡大安寺村法明比丘尼敬白　堀川住天下一筑後大椽作

三、萬治二己亥年二月　日　施主妙祐　和州添上郡大安寺村江爲妙空壽淸妙圓春慶也　天下一大和大椽氏次作

四、寛文十二子壬　南都上田勝兵衞保重　奉寄進殼鐘五丁之內　和州大安寺村念佛講中　爲六親法界往生極樂

諸行無常是生滅法　生滅々已寂滅爲樂

五、天明七未年六月廿一日　大安寺村茂兵衞　西六齋講中　爲常屋休無信士

（尙年號のないものに「施主北ノ町染兵衞和州添上郡大安寺村六齋講中」もある。）

（註2）　嘉永三年以後の上錢半通受納所は別當北僧坊と宿坊滿米堂又は念佛院となつており上錢を半分ずつ受取つたものとおもわれる。

（註3）　各曲の一節を一段といい、はじめをカシラといい、終りをシリという。

（註4）　大安寺六齋のバンドウは三段と四段とが十三佛の歌念佛で、五、六、七、八、九段が融通念佛である。十三佛の詞は

ほとけのしだいをかたるよ　きかれよ

一不動　二釋迦　三文殊　四普賢

ナンマイダー〳〵〳〵ナンマイダンブツ　ハー

五地藏　六彌勒　七藥師　八觀音

九勢至　十阿彌陀　阿閦　大日　虚空藏
ナンマイダー〳〵〳〵ナンマイダンブ

（註5）墓地の草刈は今は青年會の仕事でその代り各戸からあつめる墓地掃除料は青年會の重な財源である。興の管理も村の農業協同組合の手にうつり六齋講は念佛のみとなつた。

（註6）この文書は表紙に「當村墓所燒香場覺帳　寛政十二庚申歳八月吉良日　大安寺邑東方　六齋念佛講中」とある横帳で

乍恐御願奉申上候

一、當村墓所往古ハ燒香場有之處朽倒候得共困窮之村方に候得ば長く再建も不仕其儘相成罷有候　然る所葬送之節は導師を始一統共濡候上　野邊之營も出來難迷惑仕候ニ付　念佛講之者共持寄候而雨除之ため貳間ニ三間の物假建ニ仕燒香場ニ形取建置申度奉存候故　乍恐御願奉申上候　何卒御憐愍を以右願之通り御聞屆被爲下候ハハ難有奉存候　以上

寛政十二申　　大安寺村六齋念佛講中
三月廿一日　　惣代　惣　助
　　同　彌　七
　　庄屋　善右衛門
　　年寄　長　次　郎

御寺務
大乘院御門跡様
御奉行様

（註7）「こしふせ覺書」には「卯年こしふせ　辰二月十五日　西方　一、四百五拾文受取　内五拾文ハ藤四郎渡し　一、五月八日北室町こしかし　せんべ屋大吉（以下略）

など毎年の興布施を二月十五日に清算して一部を墓守にも渡している。興は村内のみならず他村へも貸したようである。二月十五日とあるのはこの講が涅槃の講をやつていたことをものがたる。

（註8）慶應三丁卯四月　日　念佛講田地施主彌兵衛　東組

東西四間　南北十四間　畑十九坪　新畑地　五十六坪　合七十五坪四合地　此米三斗

（註9）融通回向ともいい、講員の覺書では次のようである。「光明遍照　十方世界　念佛衆生　攝取不捨の光明は　念ずるところを照し給ふ　觀音勢至の來迎は　聲を尋ねて迎え給ふ　日々不斷の稱名は　上むねのれんげを開くなり　踊躍歡喜の涙には猛火のほのほも消えぬべし　一念彌陀の功力には上無量の罪も消滅し　現世はむいの樂をうけ　後生は淨土に往生し　上諸行無常の鐘の聲　生死のねむりを覺すなり　是生滅法の春の花　四萬蓮臺　さきにおい　生滅滅已の秋の月　平等利益の光なり　上寂滅爲樂の玉のゆか　淨土へ詣るも實證なり　ぼんのぶこくも彌陀ともに　さんどくしそをの冥利なり上三界車の輪の如く　めぐりて三途の苦をおくる　上は有頂の雲の上　下は奈落の底までも　光明あまねく遍じては　黑闇地獄も照し給ふ上扨て願くは彌陀如來　我等を捨ることなかれ　極重惡人彌陀ぢへん　唯稱彌陀得生極樂　ひとへに阿彌陀を念ずるならば　安樂國に往生する　融通念佛なむあみだあんぶつ　なあむあァィだァんぶつ　ハァ融通念佛なむあァいだァァ　融通念佛なむあァいだァァ（右ひらかやし）ハァァ融通念佛なまいだァァ　なむあいだんぶつ　なむあみだぶつ　なんまいだ　なんまいだんぶ願以此功德　平等施一切　同發菩提心　往生安樂國

（註10）この歌念佛は訛りが多くてよくきゝとれぬが七節目は「ムーなァァむゥあァァあみいだァァ（平）オーにしやかさんしやか三にもう四しやはてんにん五しやふししよがんもんぶつ速得成就なんまいだァァなんまいだァァ」で八節目は「ムーによにんの後生は藥師をめさるる　やくしをめさるゝ　十三佛と廿五の菩薩は　かげにもなさるる手に手をあはせて　むかひにござる　なんまいだァァ　ハァなんまいだァァ　なんまいだんぶつ」である。また西安堵の新阪東には「極樂の土產に何あげよう」の歌念佛があつた。また今國府と小林には青年の鉦講念佛があり團子念佛を彼岸と盆と十夜にやつていた。念佛は打出し念佛、なげ念佛、ぶがけ、だがけ、なむほい、鉦の打上げ（はてがね）の六段にわかれていた。十夜にはにぎやかであつた。またこのあたりには、六七十年前に踊念佛が他所から來て新盆の家をまわつた。カンナクズを赤くそめた御幣を立て鉦太鼓にあわせて踊つたがどこから來たかは明かでないという。

（註11）五條市周邊は大和側ではあるが高野山領と境を接し、すべての寺院が眞言宗であり高野山文化圏に入る地帶である。ことにこのあたりは高野山僧が冬期の寒冷を避けるために下山止住する里坊が多く、五條市の講御堂（現律宗）や吉祥寺などはその代表的里坊であつた。

（註12）西行の山家集や撰集抄、發心集に聖の妻子がここに住んだことが見え、尾上篤次郎氏も西行歌集（和歌評釋全集）の註に「天野とは室生とともに一名女人高野の稱がある。高野の結界は女人禁制故に尼僧達又は落人の妻女は此處天野に集つたのである。」とのべており、西行妻子の墓もある。

（註13）古い涅槃圖は當時の金で千圓に賣れたといい、その金で伊都銀行の株を買い、その利子で山林八反歩を買つたのが講の財産である。涅槃圖のほかに天蓋・幡・香爐・鈴獨鈷・佛器もあつたがすべて散佚した。

現在の涅槃圖の箱書には次のようにある。

「御本尊箱　天野大念佛講主中
承應參甲午七月十四日
寄進施主　　勘十郎　　」

（註14）同書の年中行事之次第にも「十月晦日念佛會ト號、山王堂ニテ行人僧天野社僧立合ニテ勤行アリ。此日法眼與ニ乘リ出勤ス」とある。

（註15）延命寺の庫裡は今燒失して無いがもとは十二帖敷の六齋の間があつたという。

（註16）一、二八月彼岸七日之間、七月八日より十三日夜迄立念佛中延命寺へ出席廻向可致之事
一、二八月彼岸中日ニ者八ッ時より出席致廻向相濟次第年行事中より齋差出夕飯候事
一、二月十五日涅槃講十月十五日十夜講右兩度八ッ時より延命寺へ出席廻向相濟齋飯候事
一、七月七日晝飯後立念佛中延命寺へ出席立燈籠相立廻向相濟後酒二升年行事より差出候事
一、七月十四日立念佛中二ッニ別　壹組者下居村より相始　壹組者東峯村より相始　家並ニ廻向候事　尤晝前壹度晝後壹度
小休支度候　中飯者銘々自宅ニテ致之中飯相濟次第延命寺ニ打寄酒壹樽相催其後晝前之通貳組ニ割　家並ニ廻向相勤候事
一、七月十五日四ッ時より延命寺へ出席廻向相濟次第齋飯候事
一、十一月十六日夕七時より年行司中延命寺へ出席來年之年行司ヲ相招キ夕飯差出萬事引渡候事
ただし現在は霜月十六日講はおこなわれていない。

（註17）この村のソンジョダナはきわめて特色あるもので廊下の隅に檜葉ですつかり圍つた三尺四方の室をつくり、その中の棚に新佛の位牌をかざり、その正面にだけ五寸四方位の窓を開く、もう一つの形式は庭先に三本又は四本の竹で棚をつくつて新竹の梯子をかけ、三界萬靈の經木塔婆をかざるもので、これをタナバタサンともよび七日につくるところもある。

（註18）延寶八申年

一、米五石　心南院

爲春秋彼岸七月十五日經營廻向

寶曆十年

一、銀五百目　願譽西林

一、米壹石　花王院

（註19）一、念佛由來書之事

享和元酉ノ年より亥年迄三年メニ成就致ス講中拾三人

一、師匠　有中村マヘ孫右衞門

一、　　サコ四十四歳　重右衞門

（中　略）

（裏面）師匠宿　二十七日間　新五郎　岡十四歳　仲之助

同　十七日間　文五郎

師匠初メ賴　喜藏

享和三癸亥年九月吉日題記す　南村中

（註20）この位牌は「文化元年二月二十九日　阿闍梨宥詮、先祖代々總法界　雲月道寒信士　念佛講中　藤四郎」とありこれが一時絶えていた念佛を再興したという。文化元年で六十四歳であるから再興の時期はほぼ想像がつく。

（註21）「六遍繰り」とは四遍ならば八番までで後の八番を省く。白舞は五番までで後の八番を省く。阪東は八番までで後の十一番を省く。これを「阿彌陀返し」というところもあり、全部となえることを「通す」という。